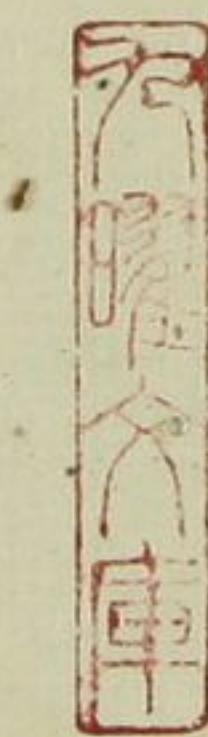




未る神名傳
同上
五

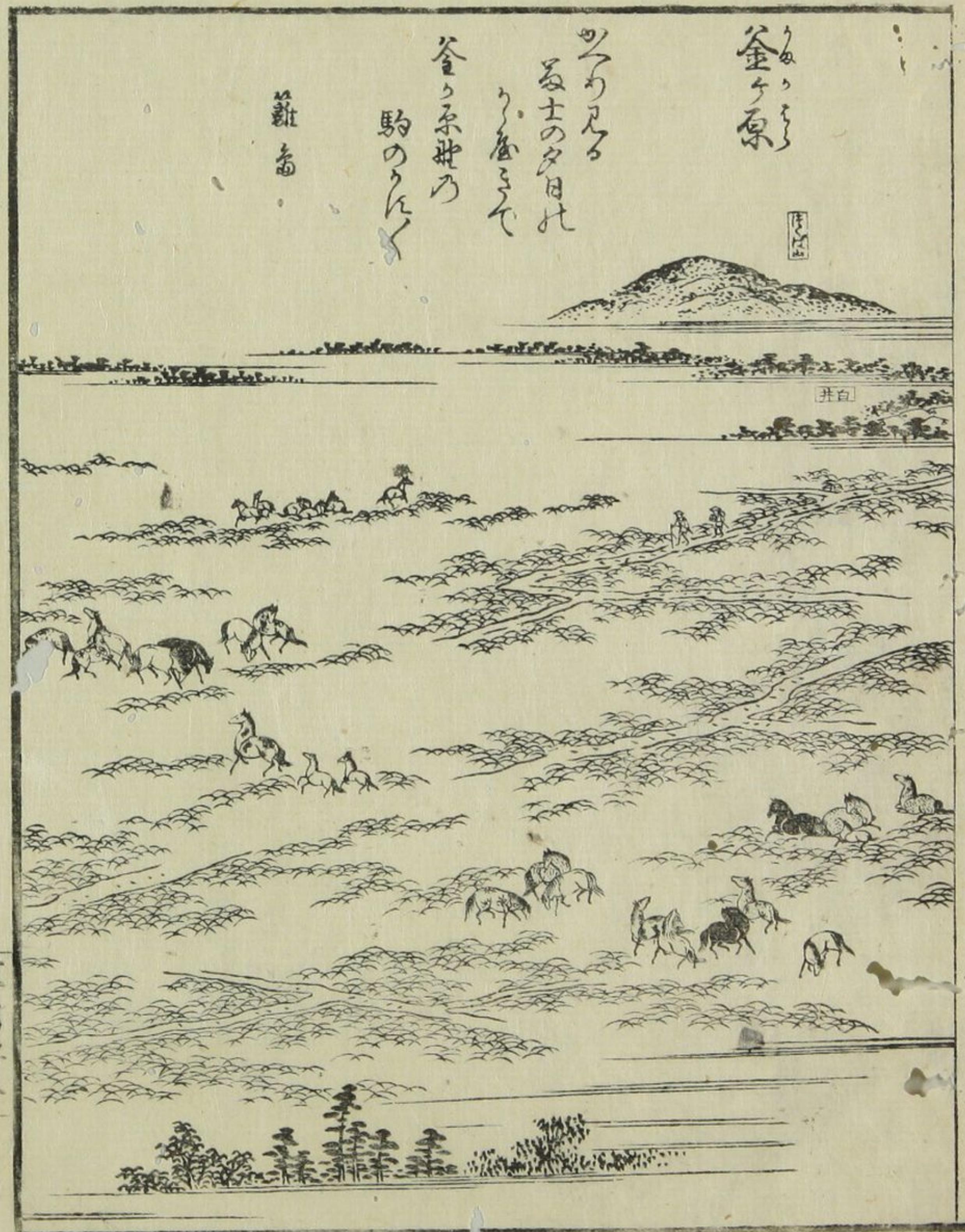
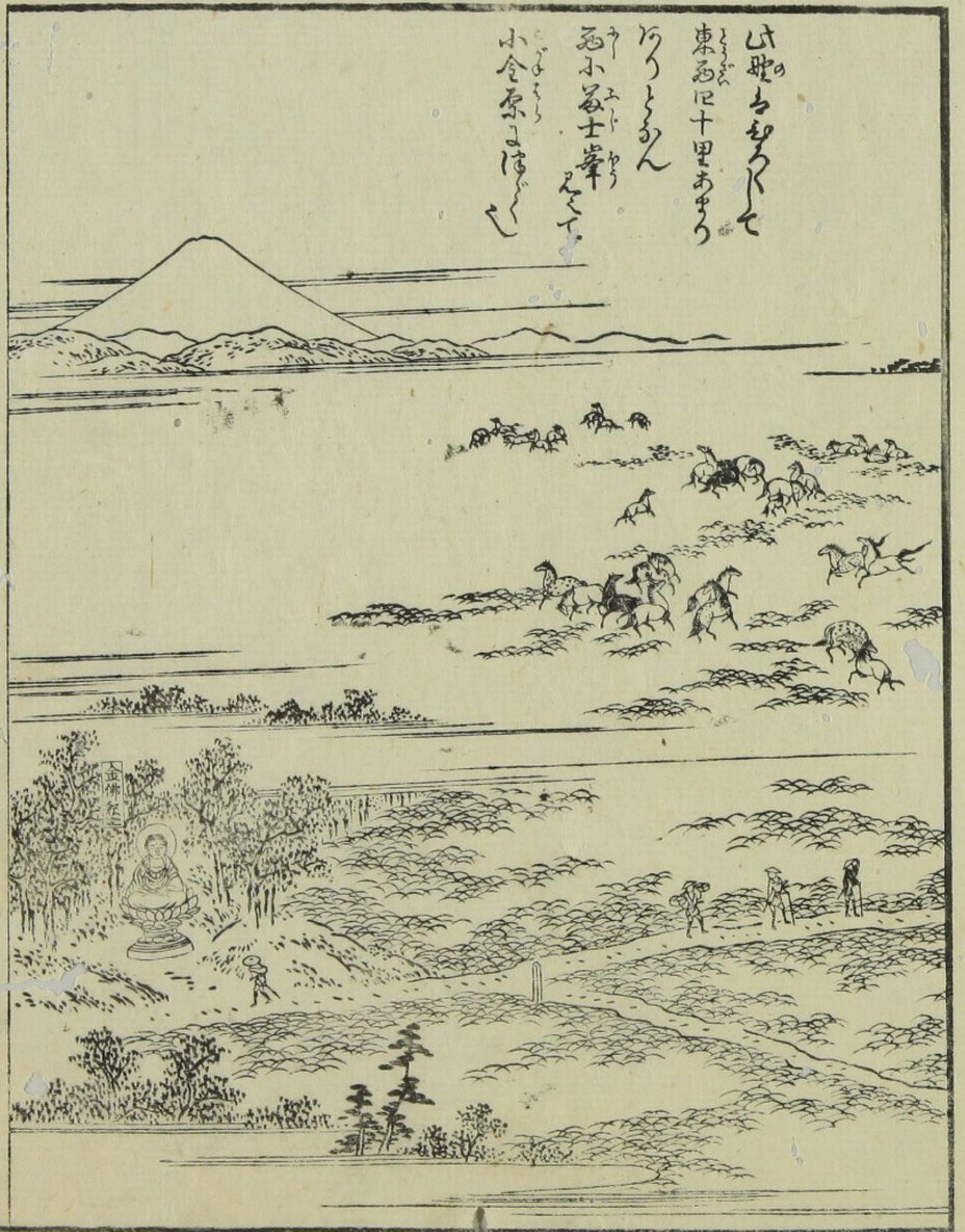


木曾路名所圖會





木曾路名所圖會卷之五目錄



木曾路名所圖會卷之五

日本橋

吾妻の神社香取息福麻あねどく宿せんとて日本橋の跡房とまも
て行徳の賓人船よまんとまか小網町二丁目の近傍河岸より船を卸
せしものあれば川と大河筋の枝川ありて名前小名本川とて右へ緒
庚等行ひ船り左へ太崎町とて工高の宿とけ町より五百羅漢の
寺寺内とて急舟戸の名作も經る中川の御園所とて守屋殿
をもりてゆきとれとまく水主とくうれびとくだに漕引川筋を案
私ありと申うる老翁出く篠浜賣菜とすひ忽べ一河の中度まふ出まへむ
ゆきと向の岸と見まが若の若菜まつりて葦の蓬葉を波打たれとも不
可とぞひ船をばくとぞは只踏みあはくとぞはくとぞはくとぞはくとぞはく
大庭園の中休みが往くとぞはくとぞはくとぞはくとぞはくとぞはくとぞはく
八幡までを里まざり行徳の茅原下中とひ豆食のちとらへとゆく
ひひりふまをとひ形ひまの北雨の道あへと道路を泥くんで

下
行徳

五言五公

下
行徳

足伏歩へ草鞋上りと竹と漁舟に坐ま六日新の風きとま
道のかずりと松根んぐり野徑をじくとて邊下都のやう張
顧まく白雲をふたうじき夕日のとて雲とく雲ともあくとつ
らだ漁へ漁とて孤とて孤

金ヶ谷まで二里八町は里の中す舊水が勢集ひて八幡宮と
終の前め生七神とには道と東海道中とまくとくちひ藤原の
人ゆき道をじて馬竹をもすれまく赤塚の林苑あく村邑水を
みて所と坐て偃息すとあらぬとゆく先づ水をもぐせりとまくと
田代とくのすとまくとまく早苗とあさみの小川とく水をひ
楊と風とくの聲のとく色もくらむとじき田翁れおとく水をひ
く水をひと水をひと水をひと水をひと水をひと水をひ
と水をひと水をひと水をひと水をひと水をひと水をひ

金ヶ谷

東乃ありのまちみかわすあらだ村角村のまち下田敵がる
白井までおもて邑里は西く田中なり下小見石を見く
田園隙くたりある耕一町八五亩をさうて差ばりて金鄉
さゑの代くをゆくわとたちがめ山中和山田屋の煙草ふきす民

稼穡の器より園を水龍とりとすう縮穀と復く夏の雨をうへ
えとゆのむとや九種は三枚下すれば秋を家作はむとゆ

林園寺一經あく金子原て下前不至耕りは野と勝くとて夏竹
扇にて風流處よしと金園の翁古十石うち野事よおとむれ

主がおもて遊ぶるをとせ一筋の馬と人扇よ出くひま
公官の脚馬と馬鹿のあく船廻一駿馬代指を終てあうと
親馬勤事ば甚もとせふほきく誠まるとる事かとくも及ば

そぐ申狀ありば多くの駒人を多アリや早く服の方へ送るにうげ世
より西の方と顔見がでやや水みや寧てもつてある是士峯

白井

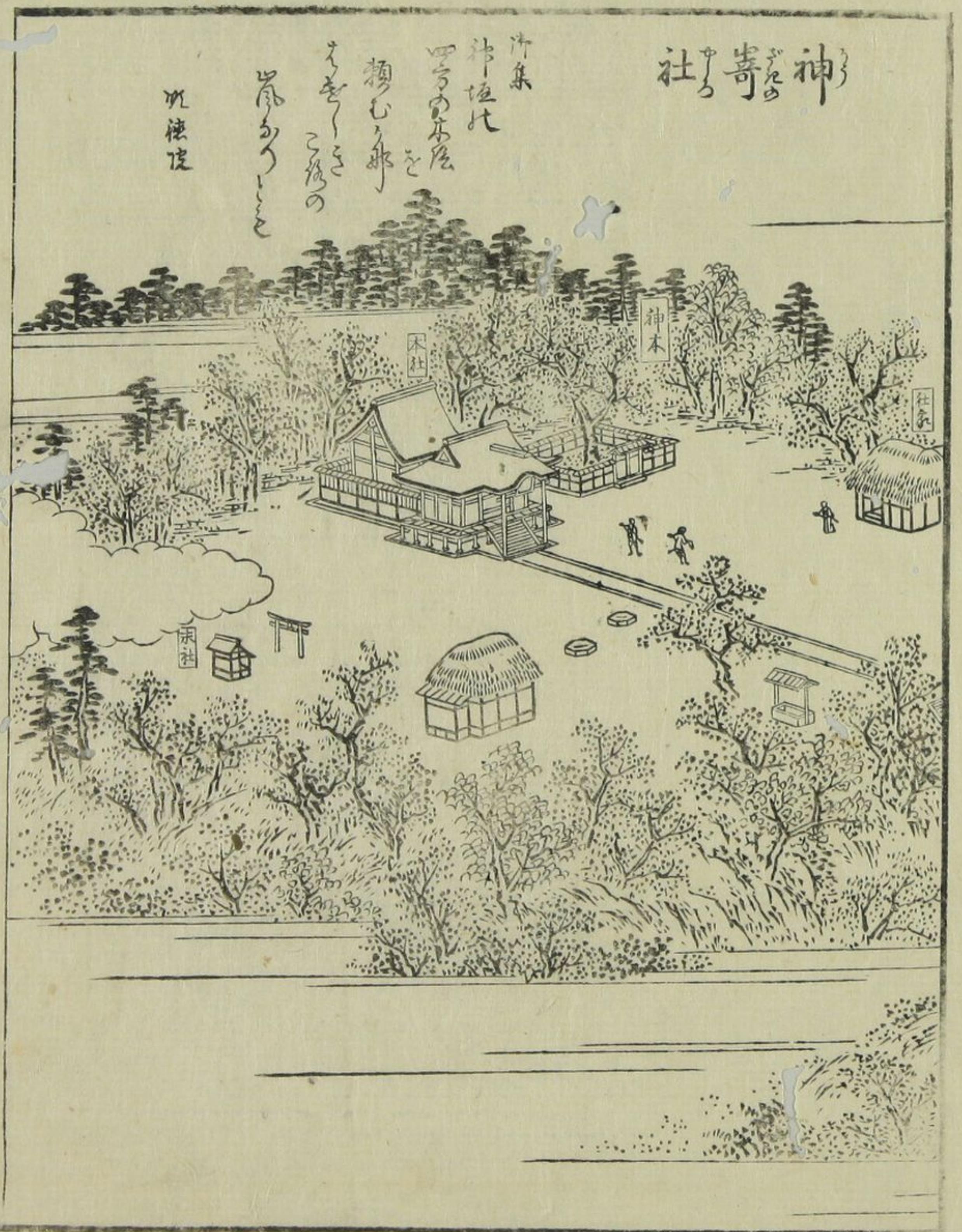
下大森まで二里は前と民居歛ひて張りてゆとあらだ御室を
三折りでひらそう中にも奇器形の附居して一乘法船の姿と

主く野外り橋を通て大森てと前よりは不つての所へりた
お舍れ地とてよく家屋多くあるもあつ農の茅屋も多くて
村のりや小坂あり。

大森
本風

本風まで艾町又野を邑民家が通てとある裏行の店をつ
て頃より農家が多くてあらや本風てと前よりは
麻鳴子で新宿十里は前と民家多くて第店も又事一驛の
端外へにあつてこれより新宿物すまばにはの新宿本勝房あつて
し新舎のまほ前の名はねてはみゆが赤妙蓮をまつてと岸の松を





浦ノ子く身へづれり。行け小自居も自然海の雲移ふ月は抱く身の
方ふ袖まく風情うしてあを云孤象とたる漁舟事わざと身より下りて
義とゆき頭生葵笠が冠き一葉の怪みよすすと標榜せ辞さずてゆ
泊の水汽すば衣櫻が瀬水店へ濁ふ祇豆を洗ふ船へ也洞て船す
漁父あす草舟下して裡舟舡のたゞの波鈎ふ二公少モ換ドモ得念せ
く芦葦の中とすすす薦す小食鱗と猿く月と舟すて歸る有ミヌ
一釣の線の外利名極く三亞の遼阔天地か揚柳の月島すて孤寂
芭花の風転くやすて雪伏ちに易林も輕波鈎く仲友を食しむ
慈の裏と見て曹公底譽るじ波浪遠く坐く巨鱗を鉤をあを用う
形所坐す漁笛をかじ鷗をさびトアテ波の急小來少約羅く渝
浪聲年うされ舟舷聲で淒淨くして古今の悲感古事記ばりて
月ふといたる波と口待よもぐくらむる桜雲のあれぞ須彌
洲の岸小舟く各自の身す小治の面えくして櫛取乃多我是寄間

母の身くみえ此のほくちへ波伏常すあましすの妻浦すと
いとめばくみおる眼がりあひ小ちびひて舟をゆくよ深くして立家
が舍ん浦くぞて逝く徳川幸ふ一四丈里も行程不秀とくれむ
居小舟く

香取

總

香取浦

下

傳

載

夏

衣

香取の浦小舟は地下總の地續が秋ば下總半属にさす

宣康

香取

總

若宮

辛社の

神樂殿

日所

太神宮

右小あ

小狹

延喜式名神大

鹿島社

辛社の

月次新嘗

祭神

經津主

金

香取

浦

を

つ

の儀

香取

浦

を

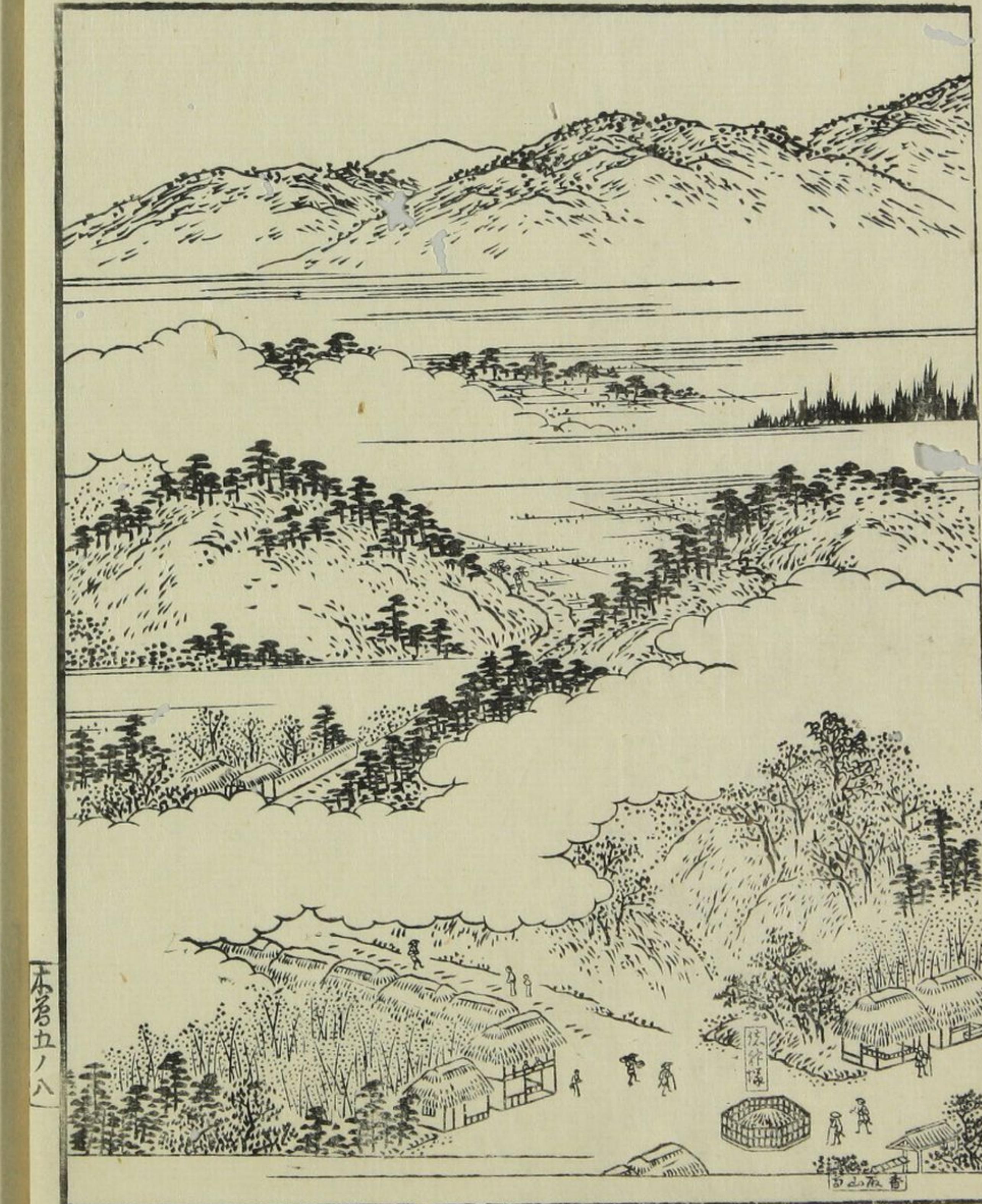
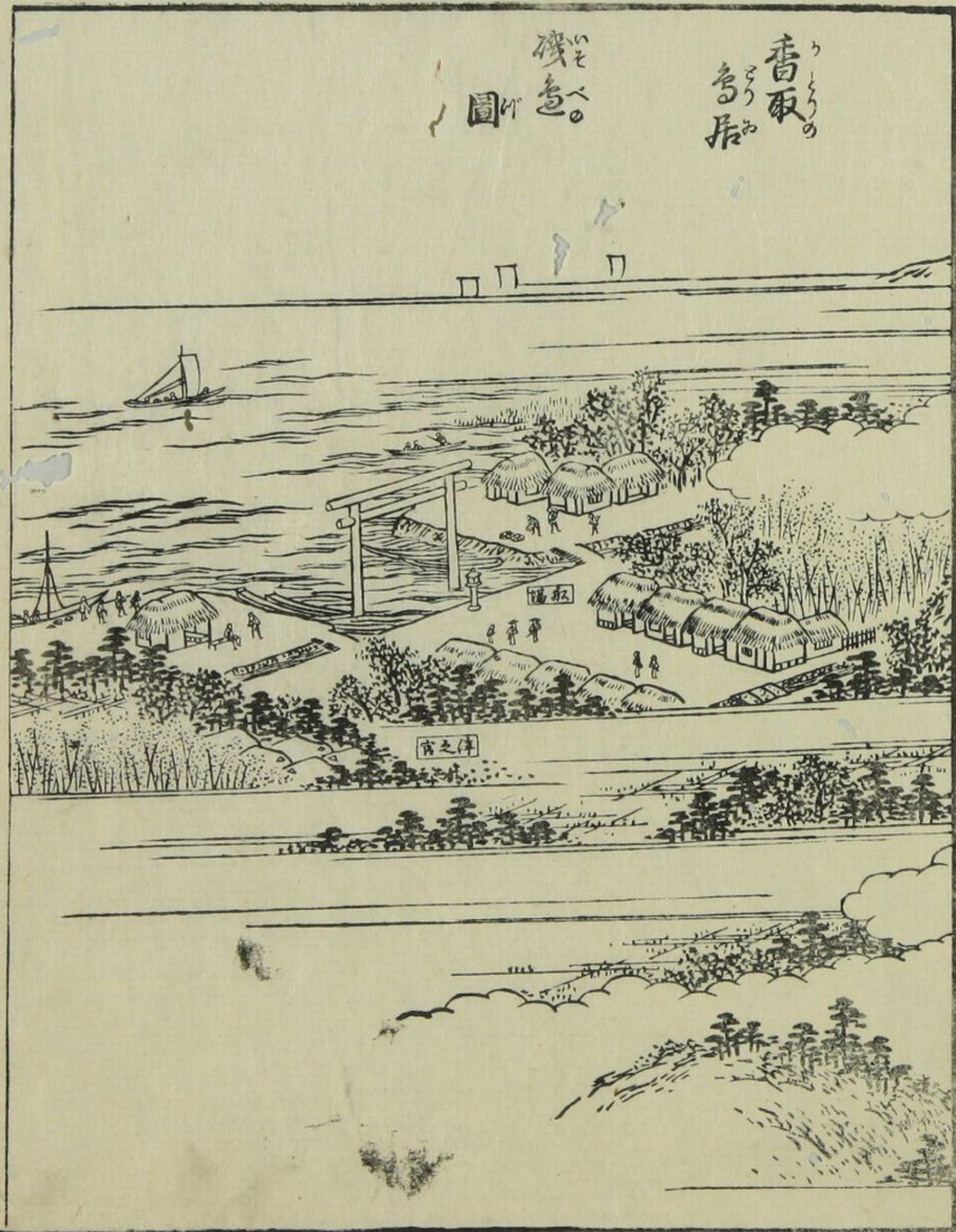
つ

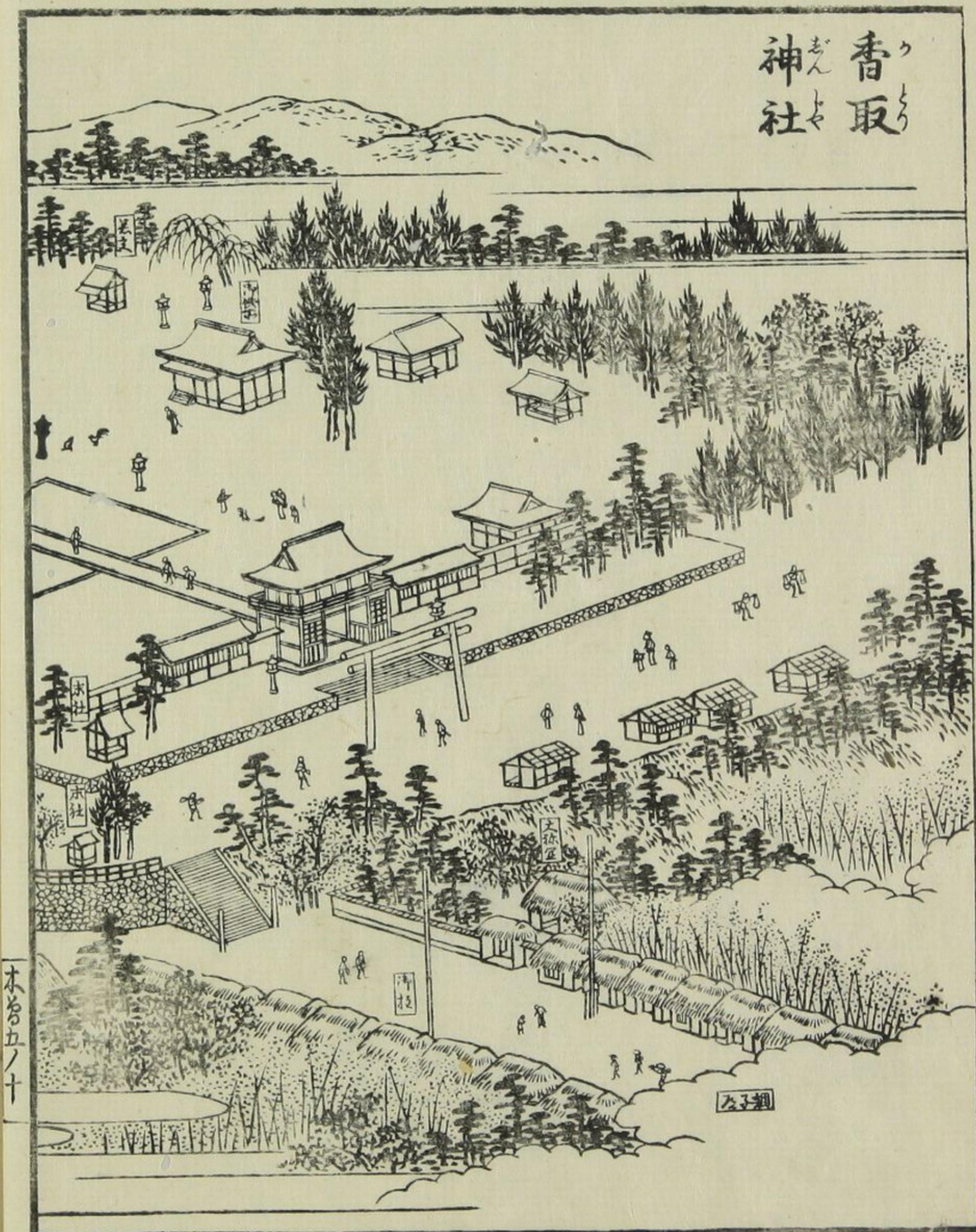
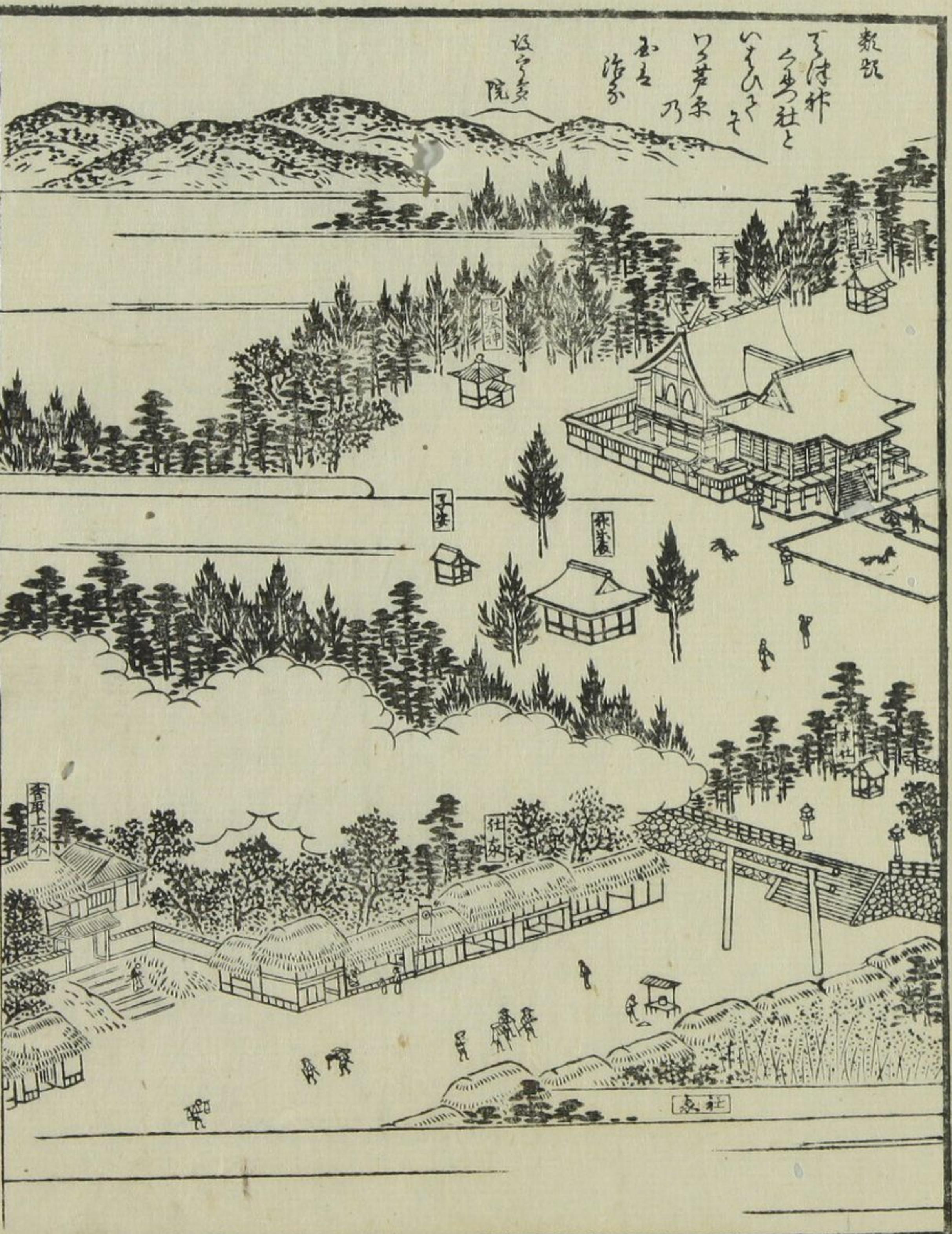
儀

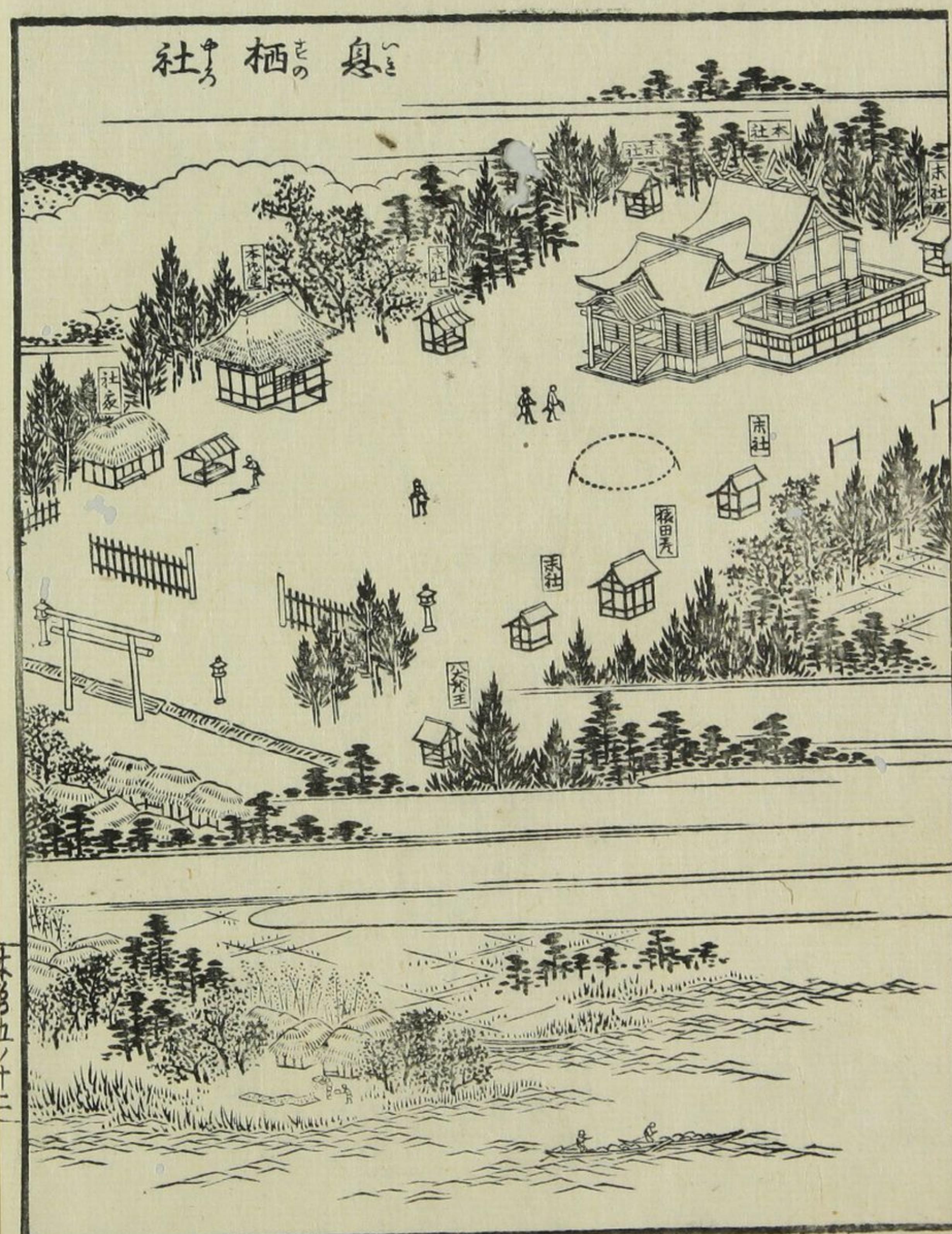
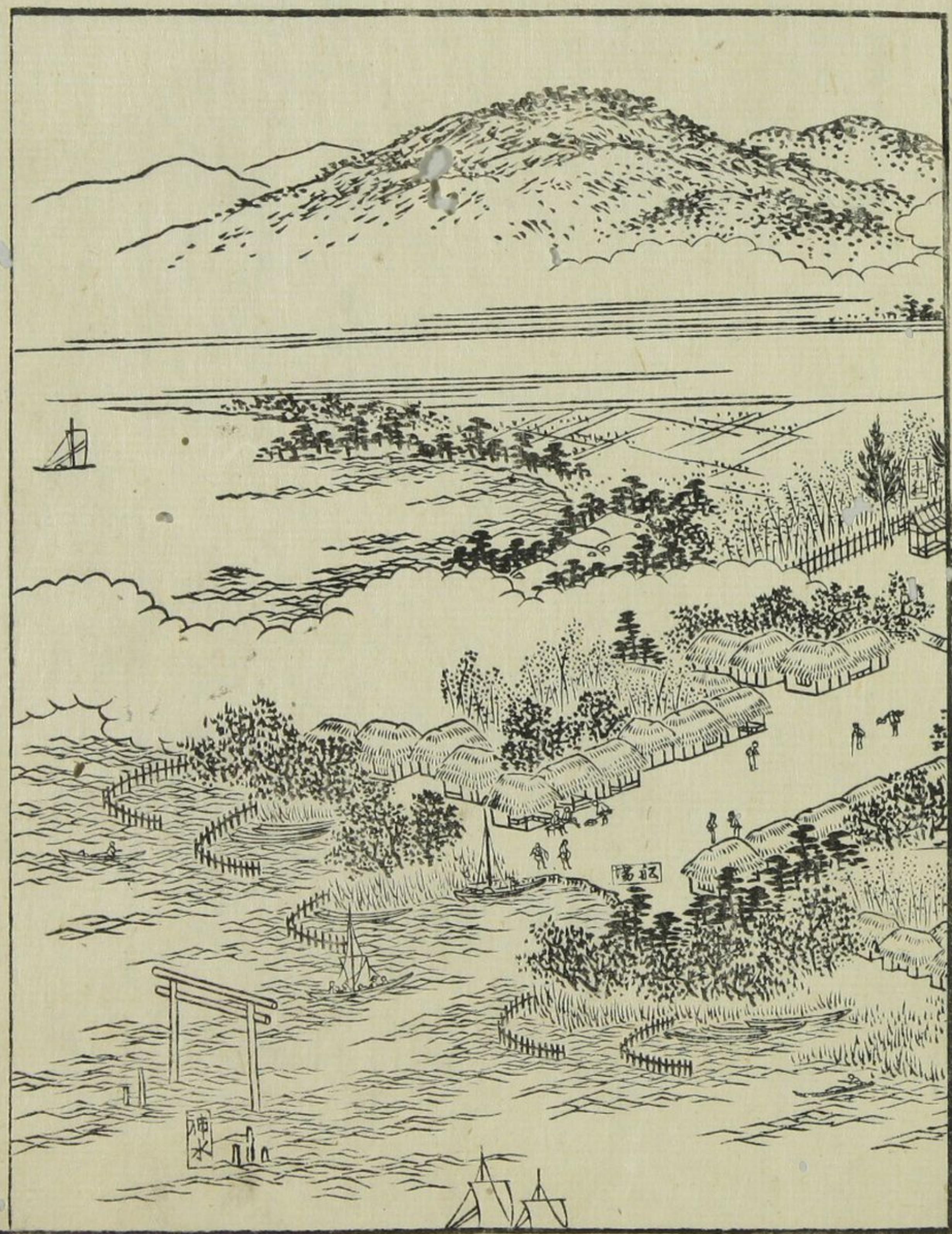
香取

浦

を







諸々還幸の際時武魔祖神大麻鳴小坐と振威主神を櫛取小坐とけ神
然後側の渓水おまめのく崇教佗本異うす放ト東國ニ社とて時小八太翁王
湖中より陰陽龍と云ニツル石井と鷲神よ歎びて金鷲院より涌出
ふ北靈家うす厥店五十一代平城天皇明神とて宗ノ移ひて之國二年乙
月十二日後系内廢小勅してちく小神祠を建テ又陰陽龍の靈泉
海中島居の左右より涌出た潮の中にありとども其事ハ法ノ御瀬の
事より船夕神伏波神を奉祀國朝越山の附墨井山城國賀茂の御子
は井は靈水と日辛ニ前の名泉又神寔小龍神歎びる跡の古觀ある
て枝葉の擾乱をくらう海中小廟堂をそなと觀の中には少生ト平房
と紀き又硯も乾く上右より禁裏の寶庫や納アリ城南社建立の記
あふ猶存すより

そむく又舟を泛て麻鳴とて爲さん河の幅半度して漕りふ
日の斜き流転のれうとく百川の全氣勢の遙くとて嶺樹千里の脛と

遼々暮霞風小坐ひと凄涼をば暮鐘の音がたりふ白浪天子深余歌く
そく拂はへ海と辛名と其情にゆふ源五郎一ふ上野國利根川辛
國坐て太保川永保川蠶類川筑波川を舍て土人と利根川とゆすと
江流四つ向つ下總國府川二重河内信太のあ郡の間小牛久の湖さに舍
又二ふ下總相馬より一川流せ辛國新店よも一流舍て又四隅あう浮游
太淵鳥音板鳴原鳥鳴りてある坂原鳥西那の界丸廣サ半里あす
眺みにとく大洋の海

震浦

行家郡小属一集懐二の申三

新後拾

ほのうかとてしれああ震浦のあほのう一

吹浦院

新後拾

白波の森を見て林天の原うてのうてに浮かうす

土浦門院

新後拾

春来てもあめをうての煙草て家の浦を名めやうん

佐位家

新後拾

寒露底の浦をりされよをゆくと見てねんをあひはく

定家

ゆく川のあらすじでてその水あしへ浦をわぐくあ浦よ

まくらべ紅日御生すと雲と彷彿の色灰かく樹くもむほうふ絵画を
見みゆる一月夜の御幸を幾くびう来て一夏のふれすと波浪あり
老ふ日は海の所はと桂百合の玉すり其枝葉の少ばかりとん絃小異く
見まし魚と波の上と頭ふれあん在ふれ鬼樂灰論どて又あれが樂
とんちくわ我國のきへと日極うれ日の光も先づくと東方網が千列の尾
舟船列東海常陸にあつて地の度サ五百里上と不祀草腹田の中に坐ん
せよ其系藻苗ふけう長ニ足伴人已ふれどもとれう脚これば腹^陸に忍
穢かと我船工ふやく形くもれ行もくとれう脚これば腹^常に忍
下緒の本廟の松の蒸湯より麻鳴すて松路十一里又あくと無波山と
十六里半松と麻鳴の廣い不高ナギ附房城さうてあ中北農家に泊
は立出く宿立つてよ飯と旅くわうとげりあくの客船とくと
こまは後小本望とて脇だよまだあくれ母子とくとて終^後を
生たまづかねて合へ御房身入茎日案内^前の者伏産とく物を麻鳴の

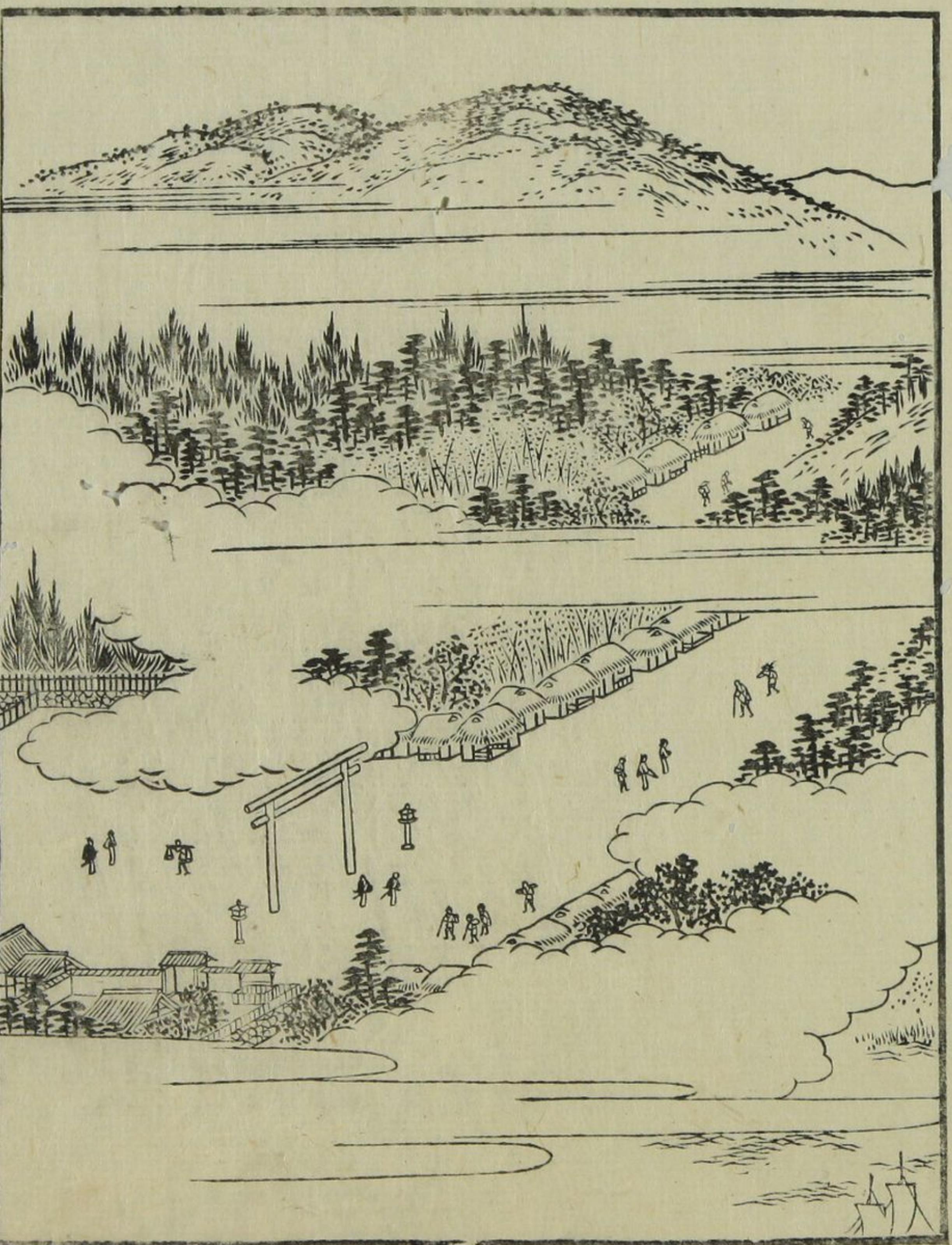
鹿島

本考五十四

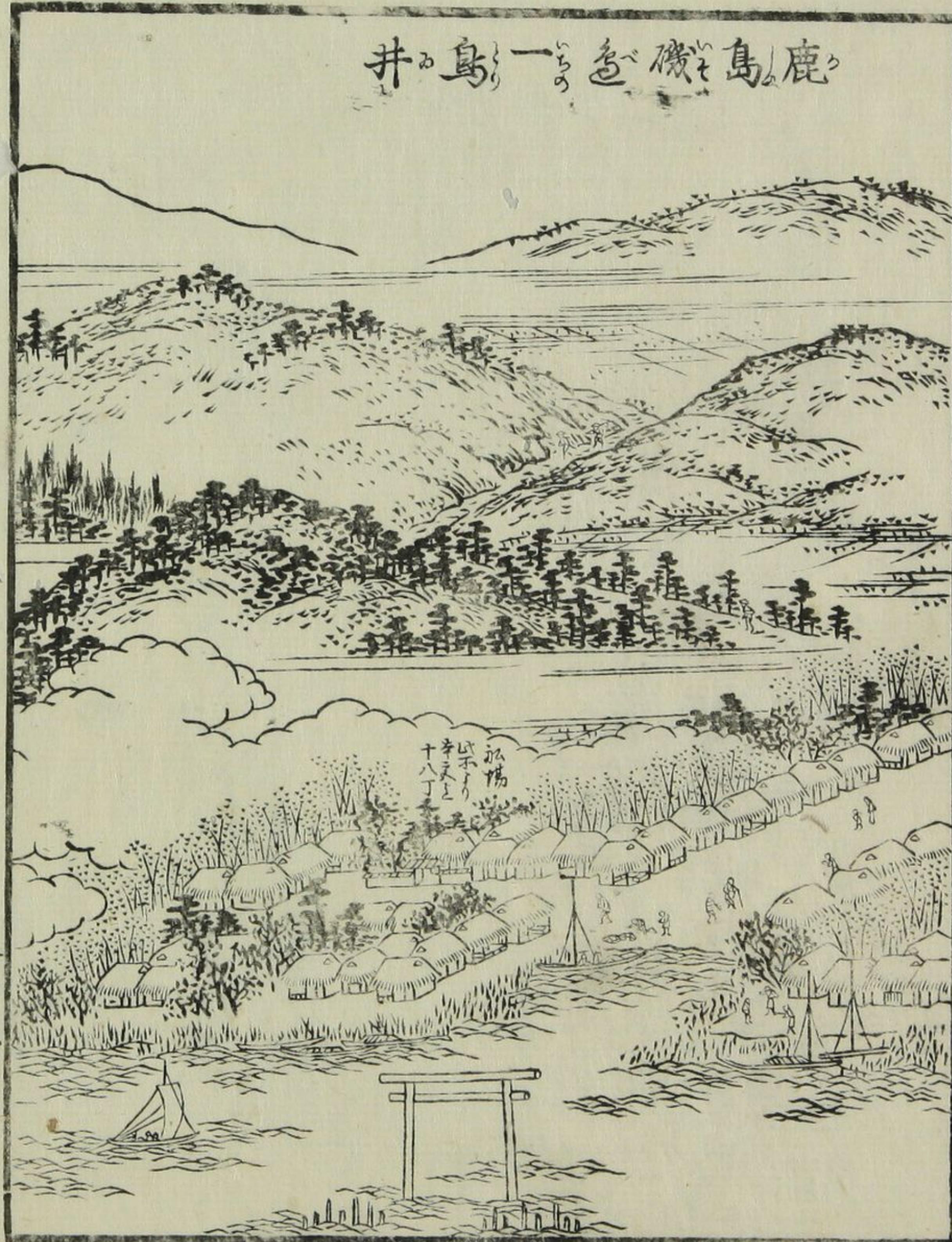
拂角^拂まで十餘町道よかへん是よあつて社壇の所二所まつらげり
神祠じんしよつる

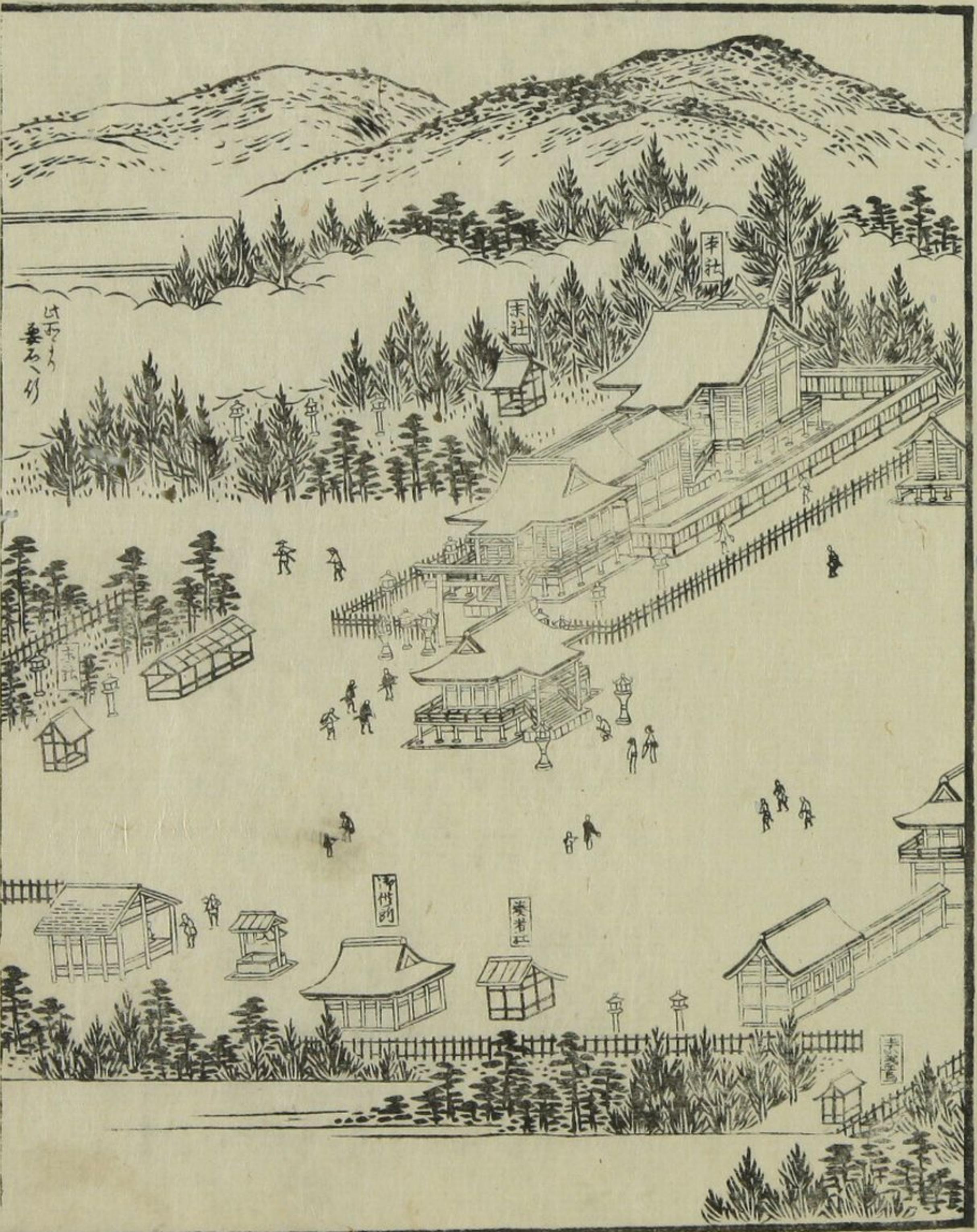
鹿島太神宮^{富國一之宮と稱す社祭二千石}
神樂殿^{大富郡鷹大和守}
祭神武甕祖命^{延喜式名神大}
奏者社^{辛社の小}
神樂殿^{辛社の小}
龍神祠^{辛社の外}
櫻門^{内小龍王}
山神社^{左右二社}
要石^{其形象數}

拂角^拂の内素盞烏社^{櫻門の外}
御供所^{櫻門の外}
手水舍^{日所小}
鳥居^{一間許}
は石根地に入る幸深^幸其本サモニ幸祭^{社傳云}御の要の如
太魚あり日本國中^通其首尾麻鳴の神打^てあまつと
貫丸^丸筋^筋放^放小扇の柄の要^要也^也て引^引て壁圓^圓とくよ



鹿島一色





高天原 高社の東十数町

相傳麻鳴神乃は此不歩く辟廉を率て外國の鬼と相鬪ひ
神利ある附と辟麻鳴の返す國度の多く事よ海満入ふ又附神
利ある附と辟麻鳴再びすまく却て越て真人家よ入るより
土人時々其幸狀也と云ふ

御手洗井 辛社より御附井ふあり傍小鳥井あり井の廣サ十四許
牛小鶴泉湯くとくを湧出也

齒社のみなしの井も賀茂のみなしの井も傍へて其傍流
行ふ小鳥經あり傍小井手洗ちゆり又之裏堂辟財天籠室客
殿庫裏池より守あり又傍小鳥碑あり

鹿島七不思議 要石 布手洗井 本川 有間原也

矢根石 有間原又結松上に不思議也

神代卷曰 伊弉諾尊転輾遇突智劍鐸垂血激越為神号曰

三度栗 七井 神代内也

本多五十七

又曰

瓊速日神次燐速日神其瓊速日神是武瓊杵神
之祖也示曰瓊速日命次燐速日命次武瓊杵神
高皇產靈尊使經津主神於葦原中國時有天石
窟所住神稜威雄走神之子瓊速日神之子燐速
日神燐速日神之子武瓊杵神此神進曰豈唯經
津主神獨為丈夫而吾非丈夫者哉其辭氣慷慨
故以即配經津主神令平葦原中國二神降到出
雲國于時大己貴神及其子事代主神共避隱於
是二神誅諸不順鬼神等而後皇孫降日向襲之
高千穗峯

武瓊杵者常陸國鹿島明神是春日第一神殿也
武瓊杵者天以進神也其先出自自稜威雄走者昔
有天闇霧方四里許其中有小孔化為石窟窟中

神書抄云
天書云

有神是謂雄走走生甕速日甕生燐速日燐生武

甕槌

支當社之神代より矛槌の將軍をして多くの邪神と戦りかばも神武天皇東征の際時も麻鳴香取の神と陣頭小出見あつて匈奴を殄くに徳一統の治國平天下の鎮守をしてちく不寧長をしく建てあひふを三笠山より移向し第一第二の神を麻鳴香取うる其後平将門礼様の財神祠も荒廢かゆび一派六孫王すらの儀孫吉秀郷建匠又其役も右大將頼朝至天下の後建之四年五月今のかく壯麗する文殿城森宮ありて社於若干代寄附し終て例祭と歲毎五千石被解まく行祭其中に太糸うろえの粗そ小舉か

鹿島大糸

正月元日より三日まで月次之神奉五節句つきくわと

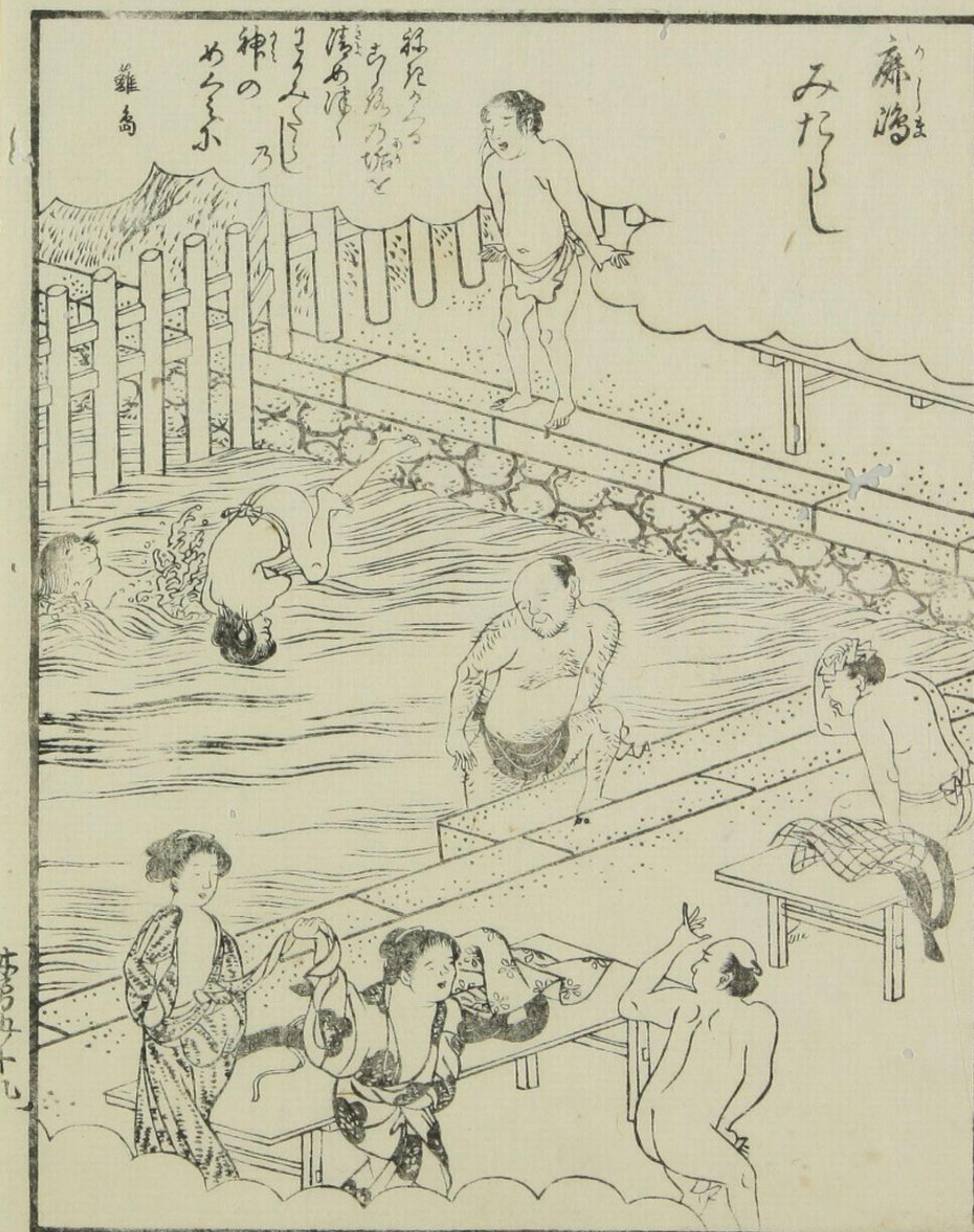
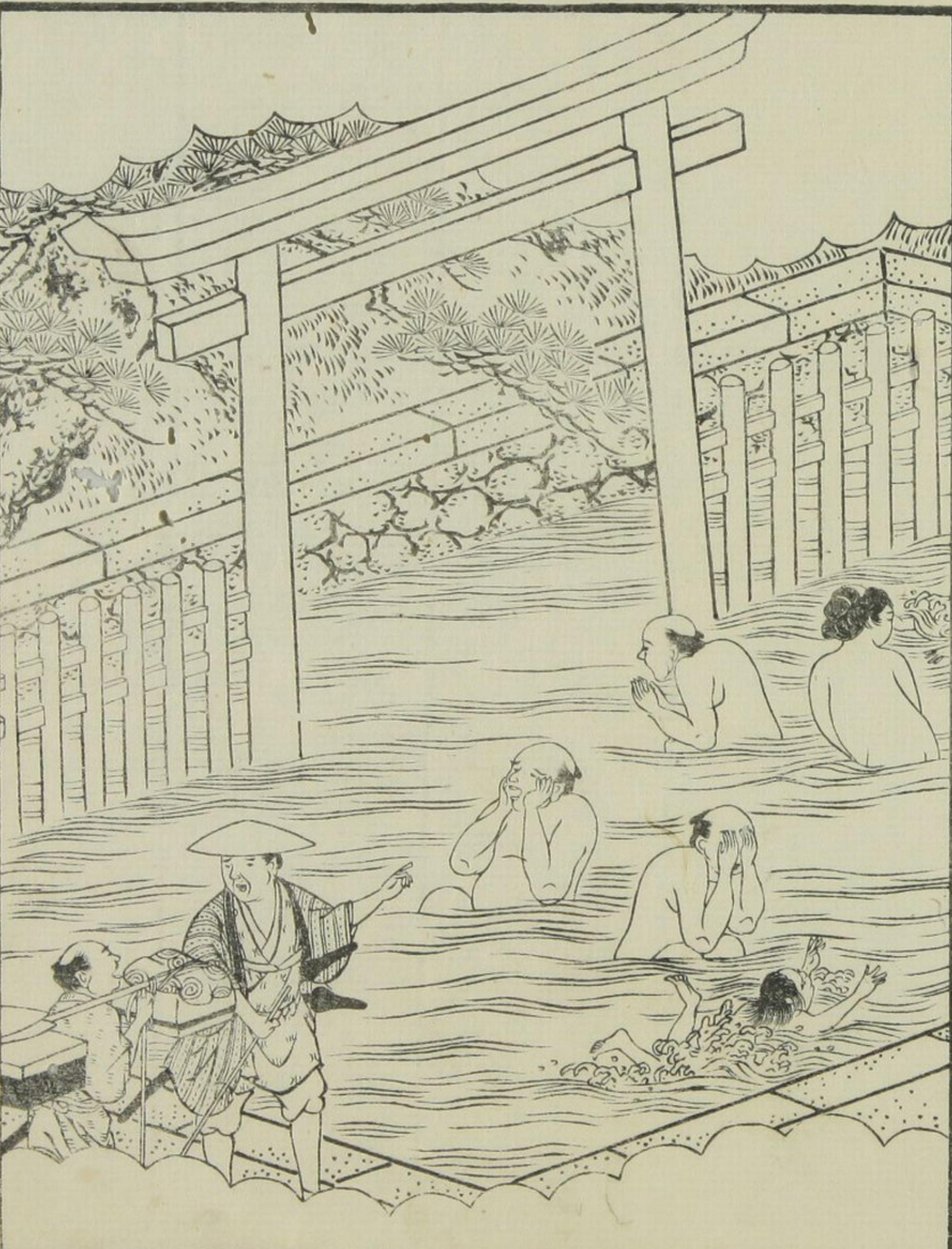
日 四年年山糸

日 五日 沖戸會
日 七日 沖戸用白馬の神奉
日 十日 沖神樂初
日 十四日 常陸常神奉

これの糸の日は必ずする女の糸とある付く女のみども紙布の章に書あはれ先づ神赤手玉を手の中にしたる男の手たる者その常うつぶすそれをあはれにうつてねどうえまおなれへ女とてなもせ思ふ男の名ある者めまが垂れて拂ふとてそれを女とて男をみつめてそぞれたとほらひかどひやうる糸うり

新緒古
糸とも別初ひち度あるが一箇の織れうるの母や 俊頼
支本 烏子とあるがちやうみすの奥の石をねやうと 光後
日 東城はるのそねびきじ事ひとけりにあすうちも、 織人手だ

日 十音月次神奉 日廿一日日引 日廿七日日引



二月 月次神幸七座 沐神從接

三月 月次神幸七座

四月 廿一日 一万社神幸

四月 祀日より十五日まで奉社奉事社神幸

五月 本月の晦日より六月五日まで神幸流馬乃

四月 月次神幸五社

六月 月次神幸七座

四月 每日 名越移

七月 三日 平國の神幸始拂門出神幸とて相生

四月 七日 七種神幸土用干神寶从脇

四月 十日 十一日 十二日 平國神幸

八月 新嘗會神幸

四月 月次神幸七座

九月 八日 重陽三神幸相撲舍あり

四月 月次神幸七座

十月 玄日の神幸

十一月 祀日より十五日まで奉宮奉事社神幸

四月 沐火燒月次神幸七座

十二月 初午三日神幸

四月 廿七日 茶末の神幸

四月 月次神幸

下署

津經塲奉社の後おあつ又井の馬場ふをあり
廣圓寺親鸞至人経記よりとて今は経物

鹿嶋故城麻鳴山は六郎宗幹ちどり名ふこれと築まつた

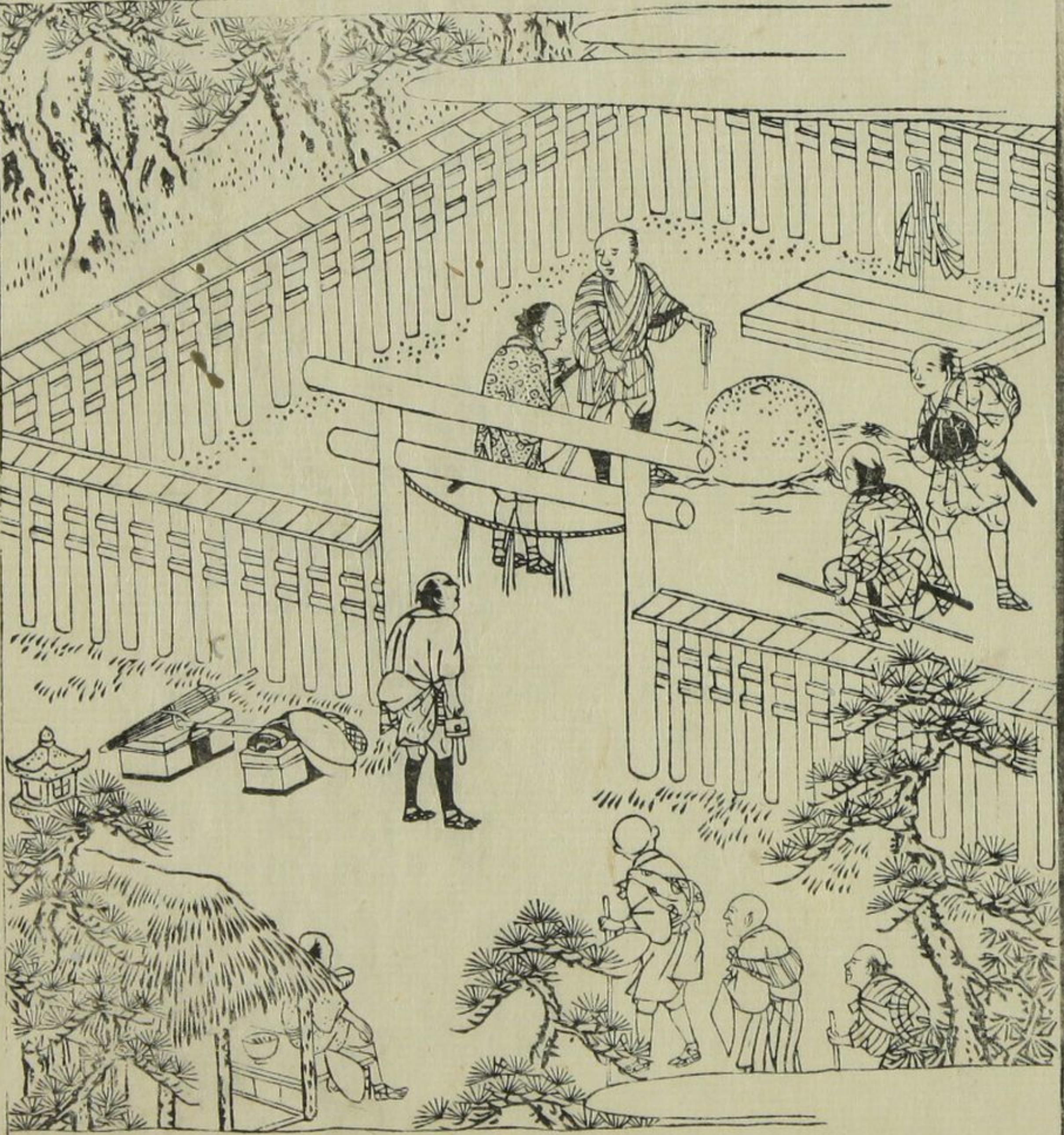
激平盛衰記乃て東壁
康島氏世系名にあり

そ終り又船よまき庵修祓出く船あよりん室舵工小舟に日の
どすかす浦風ぞよそく吹来まだ浪も河口船をゆくと近く
ちて千里もう海のまわりをすすむ船路のねくい東あひ方ふ
雲却うせうて風うす海ふらふ船底くばり幸く一
漕ども押ども船を早くうなげり幸く一
つゝ連風はくく樽を変をよくねえの方へと風うるがまく先
康しひの方へくべーとよめゆうおき風の舟幸く一
よう水里も本ほんとふ赤く船ともやうたまがくざくとねく
中立が水立ちよ腰をもみし約ねまぶらふやあく何の立つあん
海をくわべ又うれすでの様くとてほづぬたがくあくばづく方をせよ
向ひの地よ木べーとくは船工御親の通伏主一向の地く漕り小延方
てふ前あつて神木私心だくとく又櫓底立むく押くふ室をう

要石

飄葉れ
麻乃
神乃
轆轤
清らう

木道



にて東方の間ふ若く私とあれり放まわねん私より下を支度
かどて而も持せ板久の道を尋すありけ道は還形しゆうて
せんれきとく御聖らくみそひくして左の石を修整せ色林を越て
武里許もゆけを板久のゆづる着くは地と赤色いとめくすりく斜
カノビ十二の橋もよあて西湖の六橋又陽長縣の橋と長サ直ナ七十
武丈橋中高くして虹の形ふかうこゑを比へて風趣の地うう
宿居をに車へ造り却又筋射とりるかみのりてまゝ繩々ひ妻
を拵すて川の向かうむかく名とよつて農村はくじけ流へ小死
跡うねどく意の都合の地とよどりた雖女もありうるの江口神傳
ふ是あらばの川行の音佩つださしけば

人を種姓せりやめせと芦役の中すくすくはうるがの宿の宿ても
あぐれく寒風立きとれしむる乃承の名はくとせ一乘く
やうふせはあまうこれづはアトク年と色一せひなみす

て起らせば縁をせざあん妻せ變やとおぬちほくスマヨクセ
ゆづるふある千きれきねくや
は廟東峰の書体ふきりとくやあ郭先生の歎息の序あくスマ
ヨクとくとくとく書くて攝とうううう教の序うとうくままで
け所の方言とくや

スマヨク出處の量身をあぐん

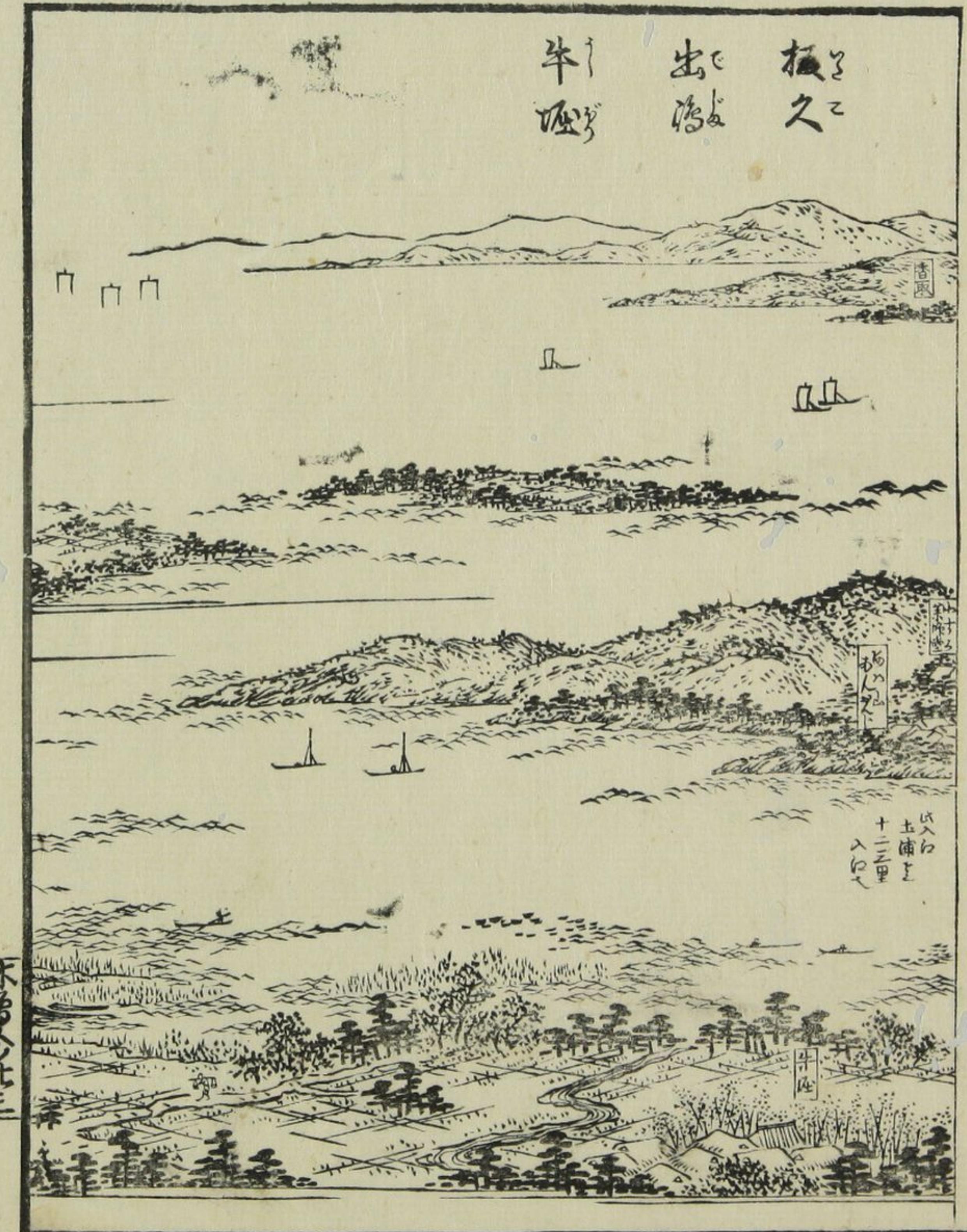
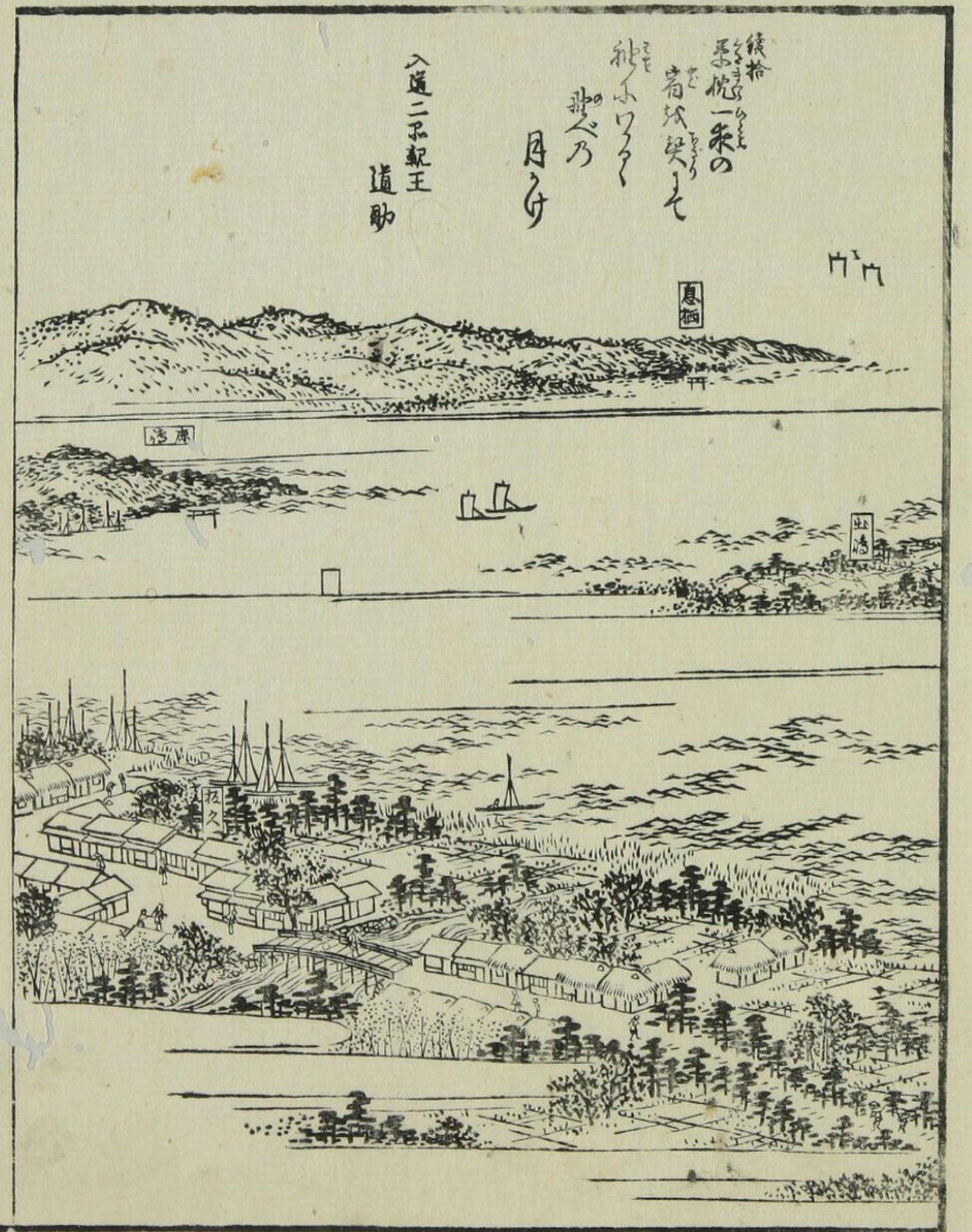
祖風

板久

常

陸

部とは奉といた事ども多くあらず
牛座すと里又廟來とも書ん
小陵よりて廟に五所ありも人多
てねうを里をくりと牛座て所ぶりづきもくはんをすそ
りは所も又何よせまは所すてかした陵うもんと一まづ
板久の地とよしとよしとよしとよしとよしとよしとよ
あうじうの常陸大板平國香の居一終ふこれ上平を真盛の文



將門の殺連小城とれて其後も爲く更アソ今ハ土屋組馬鹿の居
城をう九万五千石領せられ徳牛姫もうあれ方ト阿波ヒテシ所
三木川を潤する大池みて阿波山安穩もトア楚割アリテ松坂
とも移ヒ常陸房海尊の御子なるノ前又北須賀セ業際まを

牛姫ヒリ麻生モテ路ヨ

麻生

玉造まで四里ヒ麻生ヒ新庄渡河度み城トナリキ万石領セア
高人脚氣もアリテ糸を引いて織ヒアミ室伏古ミテ鴻巣ヒテ
所ナリ泊マカアヒ街道の駄モアビドリ里難ミの酒泉く店伏
見合ヒ墨筆紙アリヒ深本旅東名小間物のあらひをアヒトア我
タヒツジル室ヒ建スアレホ根ギモガ活ヒ経ヒテ豆ふ鹽ヒミ
豆湯火傳ヒ墨色署ヒ避ヒ船モなく自モアホ傾モバ月ヒシヘギ
ナウヒ魚ヒ其アゲニヒクナヒヒメス月面の名前モアヒトア
梅雨モアヒ季の雪休無ヌ月満ヌモ鴻巣ノ宿

難島

足をすんざく小書く而アドヒトアラヒナヒモアヒモアヒ酒旅
きモ先客ヒケル者ヒ六鶏卵サ出ヒテ甚アヒテ破ヒ豆油ササ
ナヒ出ヒヒ方モセサヌ幸ヒヒヌカヒ月モ持ヒナヒモサ一承
寒く新ヒヒ敷帳ヒ出ヒヒ張立セアヌモヒモアヒモアヒモアヒ
モアヒ用ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

玉造

小川

常陸

常陸

小門まで二里ヒ所モはカの旅舎の地ナリテ高人モ多ヒ町度ヒテ
道ナヒ葉店附房モアヒアリヒテ小川の宿モアヒ
府中まで二里ヒ地ヒ水戸街道ヒテ附房葉店モアヒ馬行裏
もアヒ水戸城下モ七里ヒアヒ地モアヒ繁ヒ高店モアヒ
小畠モアヒ二里ヒ所モ都舎の地ナヒテ高人附房葉店モアヒ所
行舟ヒ柳庵馬モアヒテ多モアヒ道細ヒテ高ヒ漸行跡モアヒ
小見モアヒ農家モアヒテ附房モアヒシモアヒヒヒヒヒヒヒヒ

頬ヒ小比頃麦刈因種モアヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ



うすうへやを小畠のひでり賜ふるゆくつと
 先ふ幸くりゆくとよしとおぎりに不審色を越く事多ひて云く日
 ちふの陽ふかされくとされを漸移行とたゞりよりよそほづる可
 りまく事材伏上つて川りてよみく案内の人も通びをてて脇を
 入然それなり小畠とははく壁り通ちて山家と云ひき御
 お寺は是が小畠の里とて筑波山の林麻うりの道はきの木を
 なる宿を尋ね小五六町も行く所とて山の酒家をすらすらと
 と木客あらとて止だ子供も入る。又緑へとてゆきこもれことある
 お漸二つの東引とく宿紙をよみこもけり農業忙しきとて止だ
 又緑へとてゆきのやくある葛家をくわへぬ
 十三塚までを里小畠の宿紙をくりよがの歩もう摩打くゑ走く
 被も吉原う笠蓑もすく成道と石高く風流と夏景當秋伏連を
 雨漏りて淋しを側本法雲寺までて梵文あつは門前と筑波山を

碑あり守山蘆士崎允明がて書承八正年夏み自ら之を立すやうより
新碑ゆ文も署月日を名額うれし袖被をも肩うて漸疏波の
事小了

中野さん

常熟十二娘

常
十三塚
陸

筑波山上までを里十三塚の里へと家多く農家もまことに
あれりよとやく通あく道す净條にて岩角崖嵬すれ謝靈運
肩山の峯に登る所本履を着まび喰したをさる時も赤葉をさる又
下あと見ゆ後畫紙をりよ又蘭亭記云會稽の山區葉亭も今
は地崇山峻嶽巖谷林脩竹あり又俛仰の間小陳迹あり其のよ
比せんや

筑波山中禪寺 筑波那
小石川 蘆葉へ昂門のてとく三郡不倚山 真壁
峰あり南筑陽家ともひ北を陰峰とも云筑陽お野して八圓の
相模上原武藏奇觀とある坂東雙の名嶽たうこれ古今の序
多モ名所すそだあらえ前ふ傳ひあると日本がおゆすとぞ

比
せ
ん
や

筑波山中禅寺

峰本ノ南加陽寺

都
蘇我鳥のてく三郡不時川
筑波
新宿山嶺不雙
真壁
北を陰津とて陰陽お對して八國の常陸
安房
觀とある坂東雙の名嶽たゞされど古今の序

本居宣長

をすれ重アタマふたどきるあひくがみすゑひてはりとめうかうを
まへしめ まへす向アシタカみあだまざれ石イシおたゞ飛波ヒタツ
けり まへす君ミコトを移シフひよ絶スルび身カラおとすあひすああアア 下署シモサク

東惠寺
はくもぬけに面の面すけとあれと考へ御氣小坊氣は
くもぬけに面の面すけとあれと考へ御氣小坊氣は
くもぬけに面の面すけとあれと考へ御氣小坊氣は

はるかに
海の上を
走る船と
島の名の
轟ボウズ
をも見
たる
波浪の
音と
風の
音と
波の
音と
島の
音と
は
うなづ
く

拾達
廉鳴する絹波のよき声くわづきゆふ多はつれ
瘦人もん
後古
ほくこくぬ乃よきむは尾のよき続うけくわづる枯の聲ちづれ
寂度

邦後拾
は今やあちくを絶ゆる事乃い承る初見
日
大勝正

信明集

男
女
社
延喜式
氣波山頂陽峯子澳本
山神社二座一名神
大一社

素神伊弉諾尊

女躰幸社

陰躰不孫尊

素神伊弉冉尊

日讀尊社月讀尊社

素盞烏尊

蛭兒尊

共小山原

二神行幸原道翁

女羣ヘリ

千手窟

山嶽井

鸚鵡石持金

持金

安座石

御山德溫大士

白雲滝

女躰の山間井

羨那瀧川

男躰の山中水滝あり

後醍醐天皇

御山徳溫大士

小泊瀧

御山徳溫大士

後拾

御山徳溫大士

後醍醐天皇

御山徳溫大士

櫻川

御山徳溫大士

英那農川

御山徳溫大士

五重塔

御山徳溫大士

大御堂

御山徳溫大士

藥師堂

御山徳溫大士

岡山塔

御山徳溫大士

三重塔

御山徳溫大士

佐子堂

御山徳溫大士

求聞持堂

御山徳溫大士

聖天子

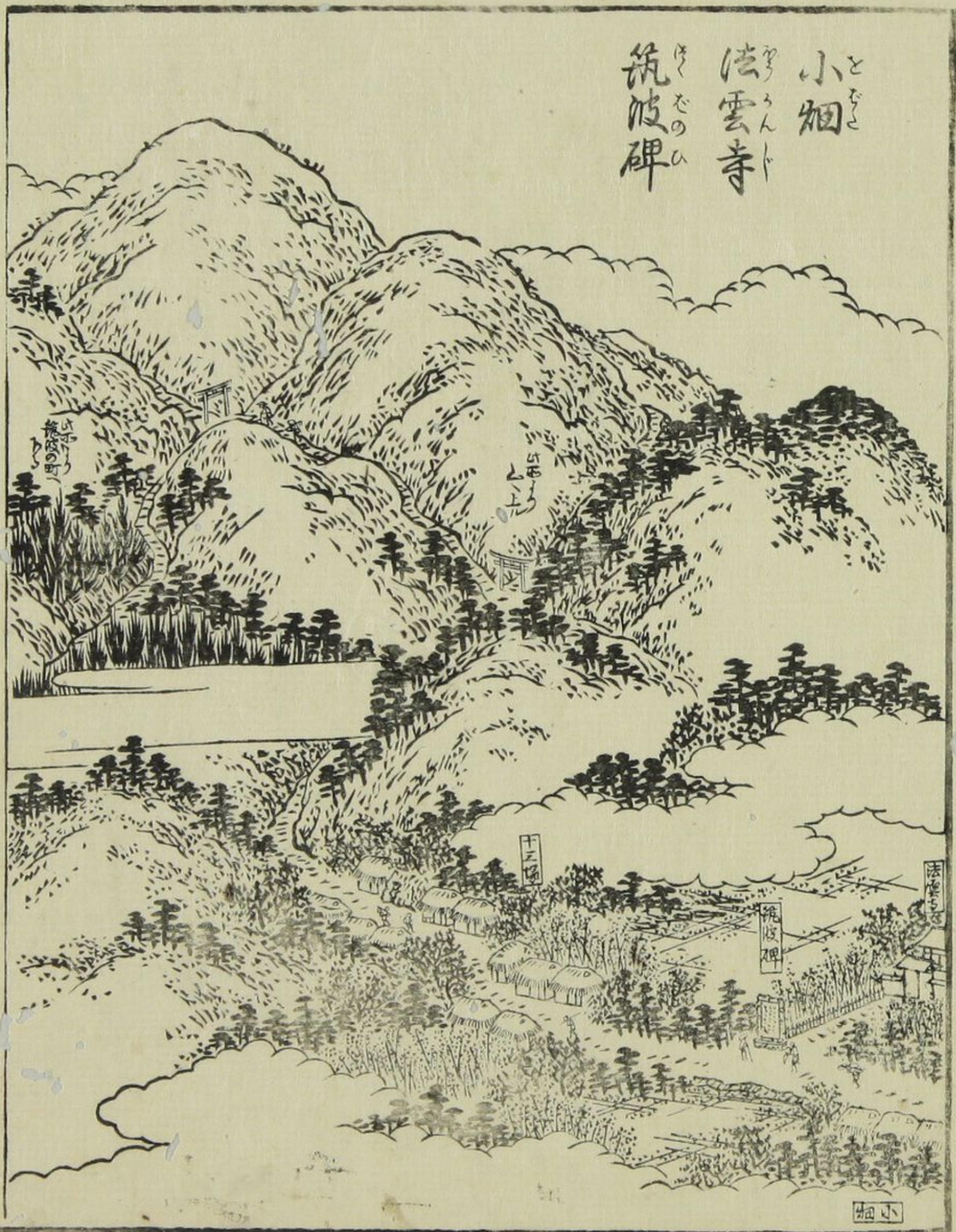
御山徳溫大士

約縫堂

御山徳溫大士

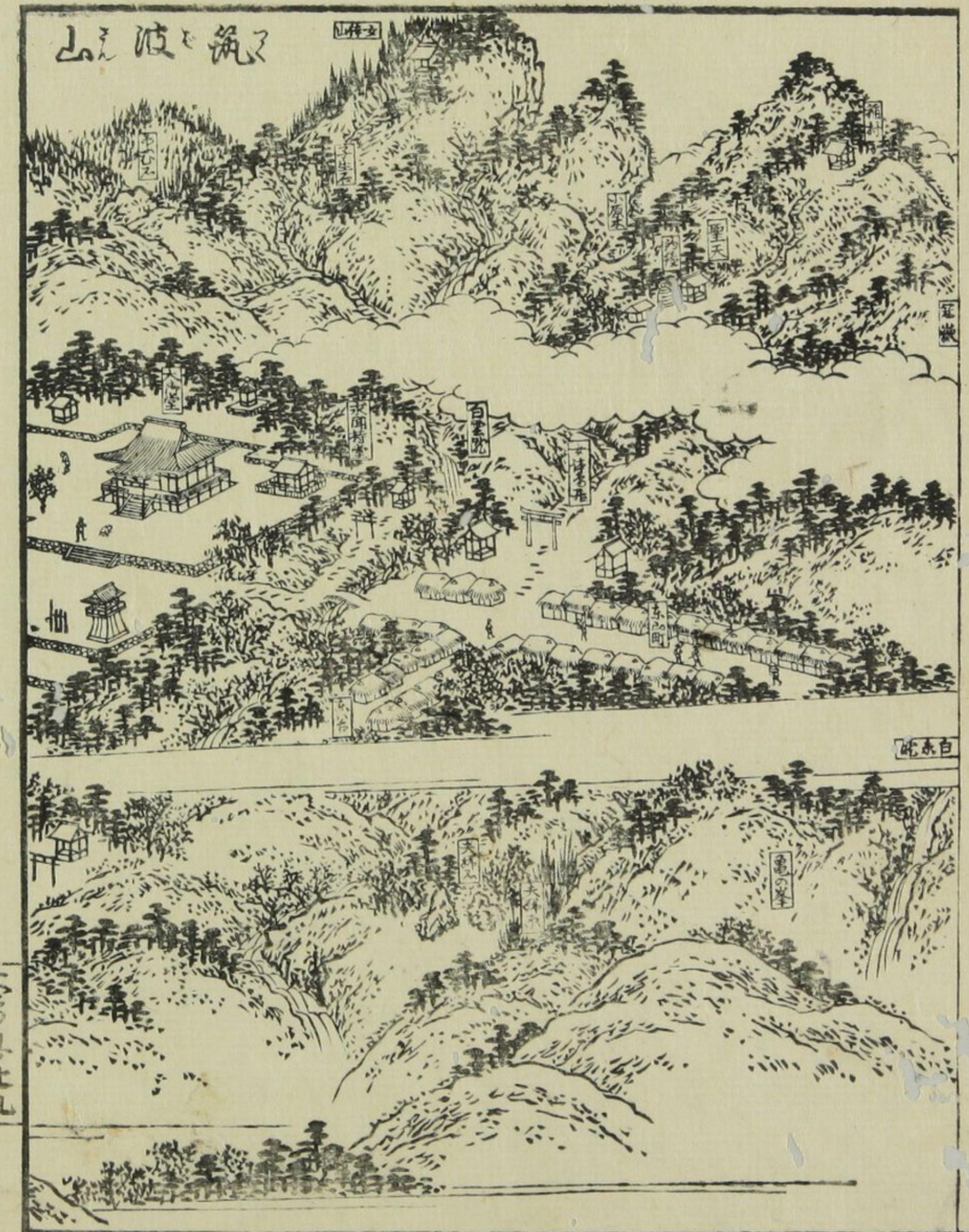
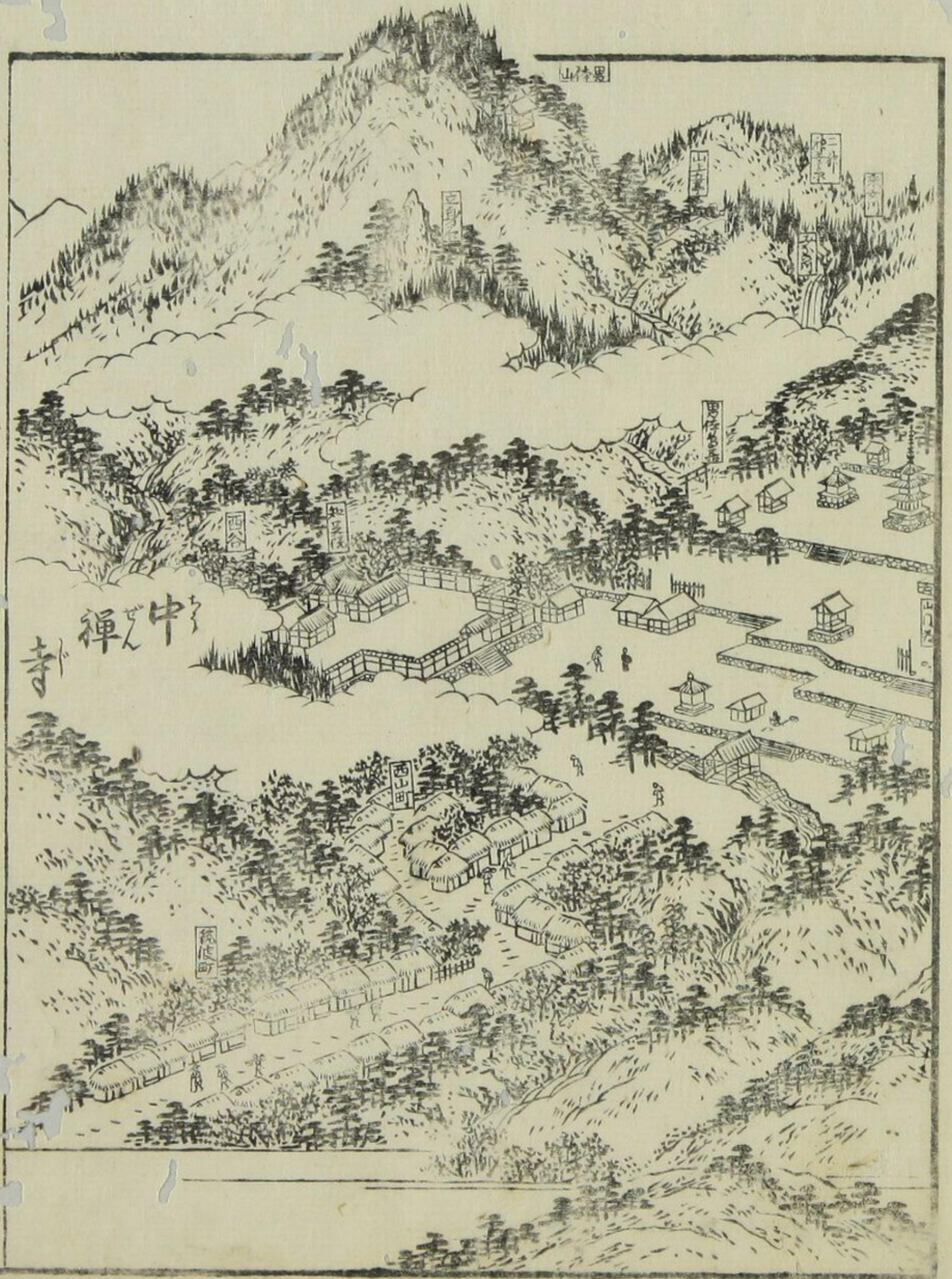
男躰鳥居

御山徳溫大士

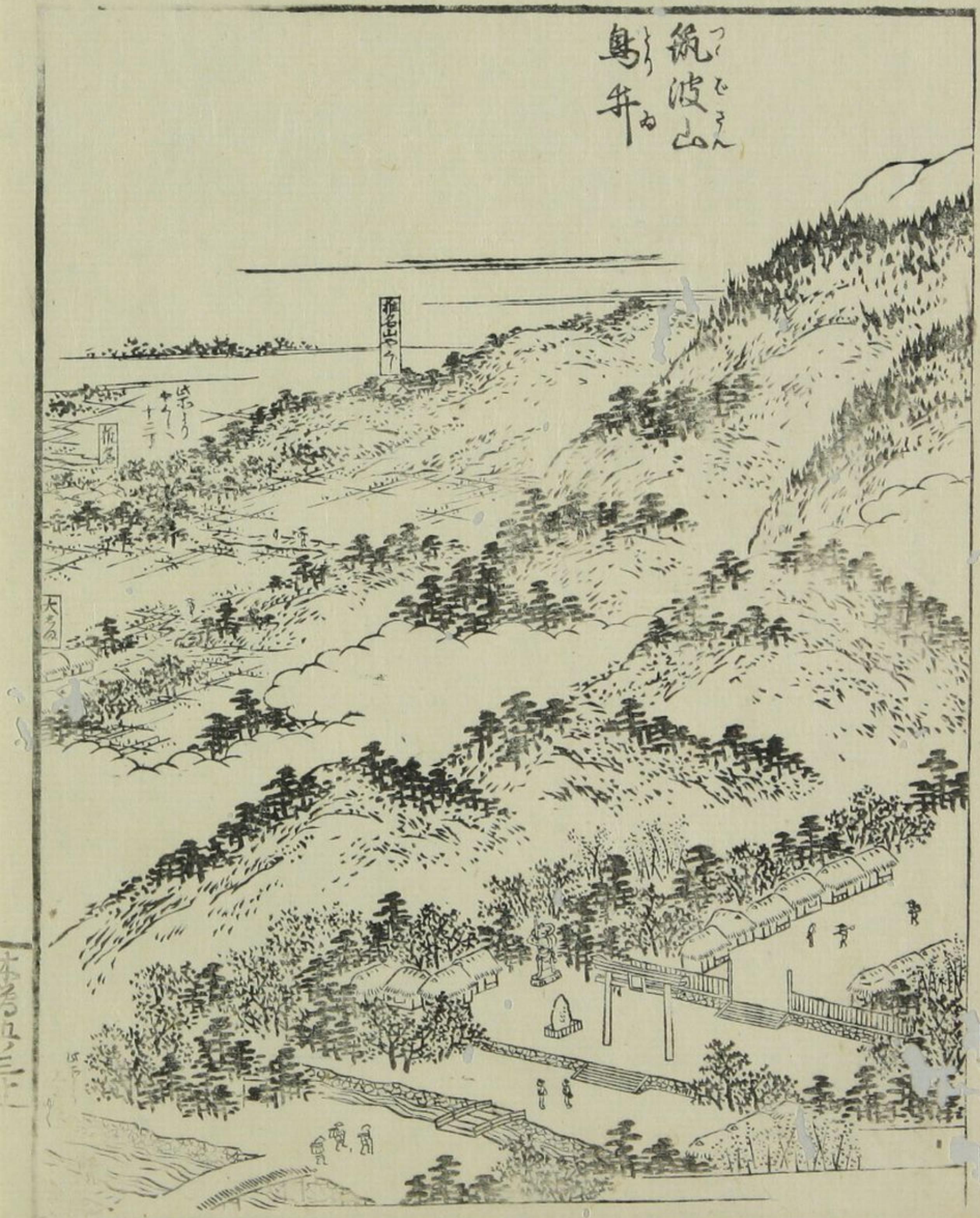


女躰鳥居あり

女身真屏あり
支は右は原キス流波と書をつゆて東海連流して波打る也
故小塊防を築くも徒然避ふべからず而く築波や書を以人犯すて
筑波と名ばく二神登山の如き也波を席織乃海より退けあくも森
彦子孫と奉祀をうて後人室又十代桓武帝の御財法相の名所一德
澄大士けよよ事とされ奉とこそと上小柱乃佛作と勅書し其外
御多宝柱の如法道種せんざわ千手作塞坐乎千手千眼の大聖なる像弘
紫衣の身物天體由達ゆだつ詔本下さし名之神田三千所と義称し乍
神殿佛閣傍邊に御坐で毫毛無く造立し終乎大士自三千
銘寫彌陀母めいとうて男体女体の如佛じぶつ其度弘仁年中弘法之師
あくも登よし身ひ勢が峯みね山とあるの密法を傳へ持よそれより紫
真云祕密の靈場として兜率の内院お比一補陀洛と號へゆ
男体女体れ峯より妙川一派内流の淹うながすと號受耶波川也



瓶波山
鳥井



椎名常陸

号はこれ高麗の神の靈泉それがまく高天御原と名附陰陽
和食の源まゝうね小山を人界界すばら坂五石の轍ひかり特古
東開官家の御跡伝あま六日く難寫る一宿人道が遙かまく城東多め
靈嶽ちこお侍の道乃清神と仰ぐを思れあつとあれど梓は瓶波
山と峰名五岳山の西角隣同けくちく小鹿東とてるとおねう
中布小星茶路本音一石中種もよし府の宿場と護持院と
号へ奉云宗行く寺院武千七百石瓶波乃町長うて奇異なう様
房多く家多數も無一者と齒園乃志嶽ありてみまほ清神志
惠とおづく
一鳥居
標示の碑なり

雪毛ヤマツカヒヤマケヤマニ瓶波山

嵐雪

小糸まで四里半これよりくて林野も同くなる所く
道うき見下したがひくほじく長き地名ふく鳥居有

小栗
下野

民居も又脚糸あうづれも日本をりて間籠本川を
はび川より常陸下所内國界あう程あく小栗村ふ治ふ
真岡下至二里八町小栗より馬どうて輕尾乗り日和よけまば
酒あどなよく馬縛の小秋婦一派安くやつむねなげふ立寄
四里りひよくさり生す木嵐をとて日々たつて旅て爲業者
を被に寝く聲もひく叔齊音陽の室に入へうとニ春乃りび
をと許由が顔川の月小径一歩ほも一朝の器をうけしをそひ
牛糞も宿もあくまゆふ若く

下野
真岡
小守登車で武里八町は真岡て前もあくサ網と本締を
さし向くもあく素門かとの服不用也是爲真岡本浦と云
は前も近隣の村愚乃翁舍地うればあいの店舗一又殿食人抱戸
も見ゆる白虎通小其貨物が遠通小走り四方小通じて金を覆む
三種分がんも人より危蟲々陶山ありて天下の中四方小貨物と

通して支易さ防産衣治く千金状役に自稱と陶朱公と号
位ある附と並相小吏と廢人あつとひ千金の主とめると自負と
やらぐは地を辭し徳とれり又脚糸のり先見くの度こと馬
傍うて案内うてりく半茅ぢやちく葛蒲の花咲くねく夏接
茅道不美一武里もひども人承も見えに馬縛うけ此へ陸奥
またも浦もきて船く四十海里とてつゝふ休や下脚の名あまく
よかねくと因うか成今里も見くびて腰舟小漁ふくと体光
往來の人もあらわを樹林も形く行舟もあく平素寄まれて遙を
かく風外の遊絲清氣の氣絆あづかせりくてお逢ふもくみ先
づく家と馬小みうひ後途ふざづりぬち所下茅あらくゆごと人
人をまたふやは先候乃あれも行旅のあづひとせしむす被く絹の
のやくふりてあはは西歴を施くと利根川下落をすとこは川を
越く中等金てす前よりとれば通田疇くろみ跡ぐふ解人草註

城内に宿す兵士のへは車あつてひと艱難してかきぬかるる。

小守殿
宇都宮まで五里半は街路平地を経て泥所へおきて左下

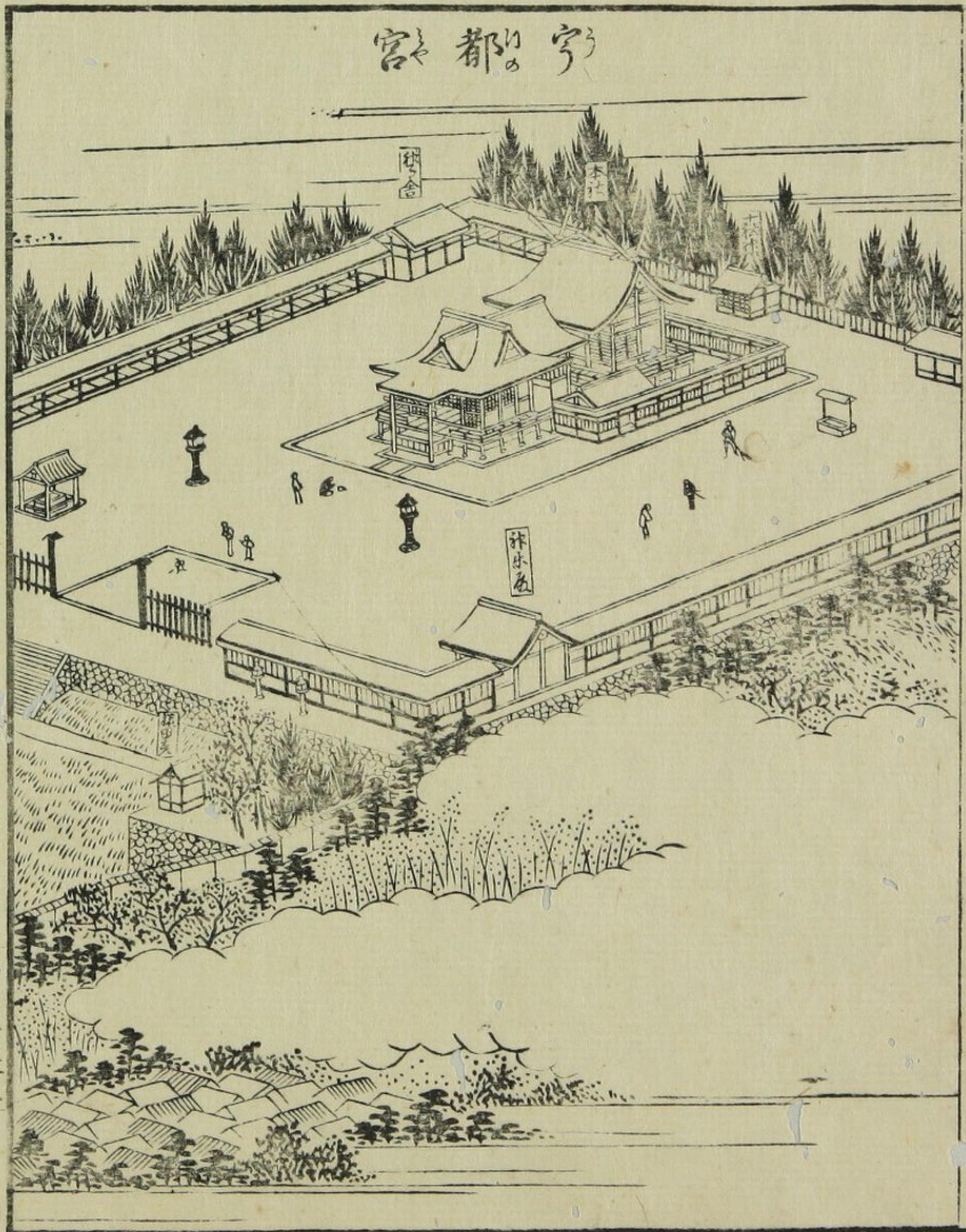
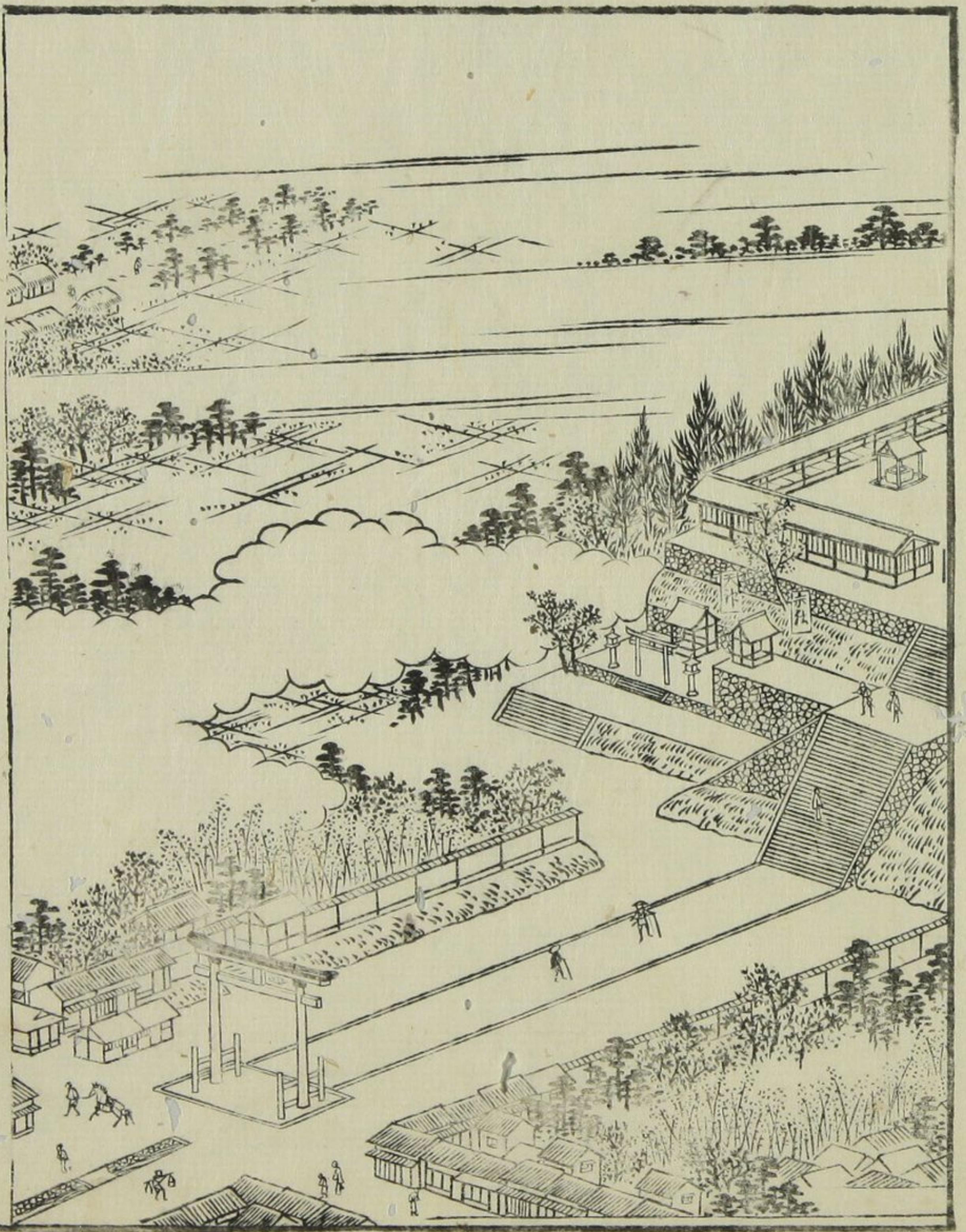
温玉河あり日不夕陽あふて日月をもむれをもく水井
をまよふねく足をあうするがまへ苦れ病氣の事月季の花をうり
まく一聲ふやまく一歩の二十四丈也ぐく水道共木橋よりある
道をむは夏のう心せきみくう浦とやらんきのみすりて今
今を思へば我身老るう今がむくせそば我ら後若一ゆく
この種より行幸ふ助けらるく往むるともかくうつくしてすめま
ふつる

宇都宮

あれうち日光まで九里疎下の半より西へ又戸生で廿里奥列
自河までせ里半十三町山蓋まで六十里

は所内珠きの戸田園畠守彦よりて七万七千八百石を領せばには金
船の増すとまくのあ家よりて後ふ前まく効用戸生よりの奥羽

街道にて販食棲店貨食家事一町中れあ乃方小宇治ま
社殿寄墨よりて清人美くい前の生土作とん
宇都宮大明神 神市中
祭神太己貴令 例祭九月九日
下野十社神 乾殿の左不
神樂殿 あく
猿田彦社 人口石階の左不
天神宮 あく
觀音堂 あり
左右圓廊 あり
神馬舎 あり
親社の左不
宇治の殿舍人を立ちて町内半より右の方へひそ日光道の左右の
道多ひ老松乃並樹處にて道を度てつるれを暑みをば本防を
通て涼し聖火とて左の紙色をば使泥扇て拂ふす不事で



本堂五ノ社三

三里あり又松の並木が通りを太汎て所へつづるば
は所まで又武里ありやうゆうと道平うよして左の並木場くら
がまぬかるの蔓して三枝とも吹拂ふかれて取り扱ふがれど風高き
山深くぞへる今市て所へりあらはる所もとくそ
人多く漁夫も駆りて半陣販食へ相手あら色あし又布の家も有
てりの通を市にさるへり小生通して別道あり是も日光
街道より日光より江戸まで三十四里字治文通り二十六里と
御室追分など通へく川くまくは今市より日光の入は神石乃所也
二里下り並木深くて所ふ農家もあり道をなすより日光御石
船まへる其間字船えより日光まで都て九里

足利の町ちふ下りあり東あ長

足利学校あり

足利学校 東の方々

門二重あり二ノ門の間小様の列樹を種へり奥の門の内ふれす
序廟あり其本より海棠接柳梅綠ばかりがざり
清廟南小向て面六間入四間うち西の松柏なり白木ばかり
あひて前より東階西階あり堂より本にくねまつ右た聖像が安置
座像にて長式尺寺許又聖像乃前左右より曾思孟乃四配乃
神主あり堂の内北前より薦蓋邊三豆のてく形る祭器あり著接著
あり神像の色小小房なり著室形りやう又神像の東は方より小房
有ある格板乃にありて其内小小野堂乃神主なり柱に明天室乃
之安刹乃而うれ其神主城主かがべ其は幕あつて上柱
清廟小御堂は學校を創り即は所と其學同所ありてとく堂初
憲寔再び學校を建て篠金の圓覺寺より僧徒住んで其院を
せすか其附より傍乃學同者多くあると集居又甚に四方
達りありて足利の學校も度しくれ憲寔篠金の金銀也名

寺ノ學校と達く和陸の群書が藏せし舊書又印佛書も本印
寺神金次文庫乃西文字所壁下書に又管於源成氏より至り大ふ金次
も額處にて書籍もみからず而文庫も名のみ存まつそれより墨
あつて近世以降は校舎ニ要和あるより後方々足利の書を持て治東
一家寺小姓を三要へ頗る才辨あつて 將軍家へも伺候に世人
之種本學校と号には附 宮家より植字一萬字と御寄附あつて是
利の學校本住持をも僧へ縁念建長寺比院後カリ今も學校と称す
学住僧住後五人ありもともと僧書院勤學院は御廟外社領百石
官象ら御寺附は御堂と寛文年中御戸より御建立あつて是
聖廟乃東の方に引もれく安殿あつて中北正面小善院を安んじ又其
西小 國初將軍比院住牌あつ

學校の東隣は虚空院寺より大寺坐て雲右一あの方小高山あつて氏
乃城跡ありやうは足利の所を西へば大河あり源流とて御足利の

本著立

太田

間を過ぎ下野上聖の國界よりとせば川上足利より二里半奥小
相生より前あり高き緒と多く織半たうり相生と緒の名よりて是
乃び諸國へば地より出

足利より上列梁田へ半里八本へ三里を田まで一里半を田へそ

本著へ三里三十町

を田へ新田義貞乃古城なり此所即新田庄りはやく城ふ有
ありて金子より新田大族分義定より義貞まで居位せらひ不く
上野國乃住人新田小吉郎 義貞より八幡宮主 長義家十七代後
胤源家嫡流の名家也御とども平氏世を守りて四海みか威ふ体もる
折りえれぞ力なく國東の傳復せなむ全副よのゆゑもよ難向と
さるちふいおる本多も出来にさんあ附地半私田へと我畠本近村
て室ひなづつてへと源平あ家朝家にはくと奉氏世を守る
とねら源氏の力を寺光源承上祇寺に日が年、かくを活、義貞

又官ありとども當蒙れと申じて傍代弓木の家け、柔
御下ふ今相持合ひのり源を思ふ不識元遠をすあくに、火車廻り
厚を義をわざを約の宿種成せとあまんと名づらうが勅令公
勅もと叶へてあどいとて土塔主の今貢代賜向くは坐廢と達
きまくを向詔ひ乃ねを私因入道要くと候宮をけのと申にあび
て清座ぬうれを義る方役を免げじとあく今首をす出一長
や車盈まげふ外寺ひてやまとが度跡で序をなる甚や日私因
勢が差業は二十名人野伏のすゞふ出でせく病中ふぐき
の事(せ)我身と處り勢のすゞておもてた旁がれふ追う
えのま附をうり同士軍がぞをうるを多う勢の都乃那疾
どもあれをよそく味あればせばぞと知能かと今母人ちふ留の事
ようちをよ今母て追つたうるを私因が勢の半にさりとてく一人
まで生捕てさら取因は生捕ども私翁少一と申そくふやけるを

今海ニ伏ださうかわあする幸全く徳せんちふあく新因巣幸運
今アリミ拂旗を上んと終ふが今首あてへけす中ドタガ海ノ小
太根主の御前城守り向んあゆり捕浦之令時々と案内ぶ
一トヒ方の便をほまく宮の傍在あふまきとよられが御伏だ
あむふ怪ひく甚房意をもとめどやと安らぐと幸ふくにけ中に一人
奇(き)のアリを拂うりと令るをす出で追へせりとやてめで
十人をぶるを人宮の拂方へとて我あうる今やく坐相(すまう)
一日あうて今首伏持あてあまう被(ひ)て云ねを思ふふ令を
あうて論者の文章に書れどう其詞ふりく
論言底ありて因化を委萬國を理すと明君乃德取(し)れと治
之四海を憲むる武臣の節也頃年(ごろひ)の間高時法師が數朝憲
形ひが強(い)て憲(けん)すに達(たつ)威を振(ふ)る様(よう)天珠(てんじゆ)江(こう)す
之京累年(きよるひ)の宸(しん)禮代(れいだい)をもんが爲(あ)ふ將(ま)よ一舉(いっしゆう)の義兵(ぎへい)を起(おこ)し

志感む御忠實何ぞ深うん卑く関東征伐せやをめし
天下辭鑑の功成致とべ者倫旨せひ仍狹達舜

元弘二年二月十一日

左少辨

新田小ち耶歟

論旨の文章家家の眉圓小傳川尾見編云われば義貞斜すだ程く
其望月よを虚痴してあだ辛圓ぞりれど
山の西あの方小義重の寺あくえ光院とよき延三百六十石附く腰附
者も官船もとこばやくうれ村邑小義貞の一族家乃左名義一
山を田山の姓系にあつ腰延邑もと田乃西本傳のゆより篠塚三田
のあらふゆう世良田。山田由良大綱ひと田と本傳北田かあり世良田と
道のち下ふある大村うり大綱も世良田乃車より江田ハニ村あり
中に田と道の側かあり由良も道のをこなり大井田。延に羽川もけ
鳥ふるのみふこれ義貞の一族家人の屋セア左跡



本上

— 1 —

其まで二里半十町本寄のあ半里、徳川よりおじやく松平に仰え
組 德川四郎義季代経ひ一門と其役代をばゆふに一門徳川
村高に白石あり其所の農家はうり坂と云ふ義貞の後裔新園庵
もくさり もくさり もくさり もくさり もくさり もくさり もくさり

野芝やぢ上

— 1 —

五上野

卷之三

廿三里半十町本寄の奥半里、徳川もつよし、松平、伊豫
組、徳川四郎義重代より其役代々は坂本に、徳川
村高に百石あり其所の農家はうち坂とよ義重の後裔新園庵人を
りて、官家より知り二百石下され徳川の道村田舎村ふ居経せしむ
或同義重の子孫岩松方ひ弟慶知り又百石下され岩松村ふ居経む
り、朝國乃色、已上貝原氏の芝の向ふ行石の渡りあり私そいが
利根川の別まゝ枝川すりて流れて利根川とむふあらず
立群、まぐさ里、芝と立群の間利根川あり立群の房川の渡り上る
官家、の御番所あり、あゆ丸あゆ丸すむ芝と立群の間、佐野川あり
て、あゆ川、官家、一里を定むよとて是より、既稿に里利根川の上を赤木
とよと既稿の上あるとて、はる保乃源も赤木とおきく名前あり
、金加聖まで二里は同小玉村とて、前ありけ金加聖まで東山
通乃年御送り

今之飞

卷之三

A circular seal impression featuring Japanese characters. The characters are arranged in three rows: the top row contains '宝' (Hō) and '野' (No); the middle row contains '八' (Pa) and '幡' (Pan); and the bottom row contains '下' (Shita). The characters are written in a traditional brush-style font.

十八

明旦今

卷之三

三

社大明神
御社り
はあらのあは室乃角 はやう小佛乃て かのハツカラノの
生えのむきにて地と平地ある今とあせり 佛乃大ササギの方
小間をくら有其乃みねやく生あつて鷦のまちを乃池より水まき
煙乃アツカ立乃張美岐 けい其村の人あつてよしとふ今無水
なれり煙も形へまつアワグある所あり
元元
「そぞろひあつともあくに見る水の煙なり」

東大元
歌謡

千載
ノリぬル室乃ハ鶴林見テモ日をくはのえうち也
野
鶴古
鶴巣テアヌアモヤクテシシタニのサニ度ヲ取テ
新勅撰
まくまく清士乃焼火を主祭トモニ金火ハ鶴も鶴も御
續古
レテニキニ有モアラムむ鶴乃御はもうたモの也
主本
ア箭や室乃ハアモアリテテサシハアモトモ今ニ至る事
日
ソクニサ人室ハ中にはシ寫ミシテシノヨリテ本モアシ
東居のひろ居申ゆニ再び起立テヨリモヒモトモアシ
あはまち乃室のハ鶴モアリナリ此の事アハアマシ
レ地ニ育テアシテ小ニシテ道ニシテ通テヒ道の壬生トモア前
より平柳トモアトニシテ通テ株木ヘツケテ金鶴トモ株木ヘツ
シ合鶴場を通テビリテ室ハ鶴トモアリナリモテアシテ
合鶴場トモアラモ金鶴場トモアラモテアシテ

様本一里、富田、下野、天明、大伏、宿、内、町長、裏、家、北、其、家、宅、
あ、ど、豪、豪、乃、才、小、柳、樹、多、植、町、の、道、む、
鄙、あ、先、ぞ、し、き、寄、聚、う、る、町、か、う、こ、れ、ま、半、里、む、う、少、年、
聖、經、理、を、主、の、誠、絲、あ、う、
大、伏、す、う、天、明、も、で、半、里、ば、向、大、暑、町、續、と、取、長、く、寄、聚、す、
岡、之、中、を、度、ト、又、裏、岡、も、あ、う、町、の、内、ふ、星、宮、と、て、高、社、
あ、う、は、壇、の、生、土、葬、う、う、善、月、圓、寺、そ、く、通、筋、よ、う、裏、岡、ふ、寺、あ、う、
往、者、發、河、乃、之、能、ゆ、う、と、日、光、山、移、す、ま、う、と、天、靈、觀、ひ、き、ふ、
二、宿、滞、遊、あ、う、乃、ふ、け、寺、よ、御、佐、牌、あ、う、寺、候、立、十、石、
今、の、損、耗、ゆ、く、五、百、石、を、う、も、有、ふ、

葉久代灣より天明峯とて蘿本を登る。峯を曰く、くまが、山もと
太伏山を天御山も櫻花山。天御より鍛林まで武里半ノ剣林
川股まで至里半川股より武列峯まで三里鍛林の源城天和子
七月湧除あれども又雲水に年再び草むすよ

七月湧除より栗田まで武里半

栗田

足利へ乃至栗田へゆだ

天明より右の方へ行天船より足利へ二里半なり。足利より栗田と
御手向は道を栗田八木城通じて天明より足利へ行そなむ
栗田へ出る丸を里経遠一。天明より足利へり。上
列沿田へゆき道あり天船を沿田まで翠二里あり。沿田を
利根川乃上りてこれむ。天田安房守信列上田。うなぎ
所あり今も城なり。日光山乃う。後う。若原を前とて足利
より源田よりも源田へ乃ちあり。川ナキもその事。

本多五四

足利より栗田室八木天明が山を越え奥原氏の

遺稿然あく小出に立す

二子山

下地河内郡みあり

後指

二子山ともふ跡ひやすたうをそおるけ伏すまを。漢人李

蓮生法師

安藝川

日向郡みん

前千

名を安藝種のちふり立くみほの傍ふくの浦ら舞。蓮生法師

本居宣長

